The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	クマム語における動詞の意味分類について
Author(s)	稗田, 乃
Citation	スワヒリ＆アフリカ研究. 2003, 13, p. 1-70
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71105
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

クマム語における動詞の意味分類について

稗田 乃

目次

１．序－分布、話者数、分類、起源－
２．言語構造－書記法－
２．１．子音体系
２．２．母音体系
２．３．声調
２．４．時制・アスペクト・法
２．５．語順、動詞複合体の構造
３．クマム語の他動詞・中動相・自動詞
４．動詞分類の意味的特徴
４．１．クラス１動詞
４．１．１．クラス１動詞－派生動詞
４．１．２．クラス１動詞の意味的特徴
４．２．クラス２動詞
４．２．１．クラス２動詞－派生動詞
４．２．２．クラス２動詞の意味的特徴
４．３．クラス３動詞
４．３．１．クラス３動詞－派生動詞
４．３．２．クラス３動詞の意味的特徴
４．４．クラス４動詞
４．４．１．クラス４動詞－派生動詞
４．４．２．クラス４動詞の意味的特徴
４．４．３．クラス１，２，３，４動詞の意味的特徴－関与者の切り離し可能性、発話行為・知覚行為・認識行為と感情性、情報性、活動・移動動詞と使役性

４．４．４．中動相文と文法関係
４．５．クラス５動詞
４．５．１．クラス５動詞－派生動詞
４．５．２．クラス５動詞の意味的特徴
４．６．クラス６動詞
４．６．１．クラス６動詞－派生動詞
４．６．２．クラス６動詞の意味的特徴
４．７．クラス７動詞
４．７．１．クラス７動詞－派生動詞
４．７．２．クラス７動詞の意味特徴
４．７．３．クラス５，６，７動詞の意味的特徴－関与者の切り離し可能性、発話行為・知覚行為・認識行為と感情性、情報性、活動・移動動詞と使役性
４．７．４．クラス５，６，７動詞の意味的特徴－動作の繰り返し、出来事・活動の自発性
４．７．５．自動詞文と文法関係
４．８．クラス８動詞
４．８．１．クラス８動詞－派生動詞
４．８．２．クラス８動詞の意味的特徴
４．８．３．クラス８動詞－例外的な動詞
４．９．クラス９動詞
４．９．１．クラス９動詞－派生動詞
４．９．２．クラス９動詞の意味的特徴
４．１０．　クラス１０動詞
４．１０．１．クラス１０動詞－派生動詞
４．１０．２．クラス１０動詞の意味的特徴
４．１０．３．クラス８，９，１０動詞の意味的特徴－関与者の切り離し可能性、発話行為・知覚行為・認識行為と感情性、情報性、活動・移動動詞と使役性、及び、動作の繰り返し、出来事・活動の自発性
４．１１．クラス１１動詞
４．１１．１．クラス１１動詞－派生動詞
４．１１．２．クラス１１動詞の意味的特徴

４．１２．クラス１２動詞
４．１２．１．クラス１２動詞－派生動詞
４．１２．２．クラス１２動詞の意味的特徴
５．まとめ

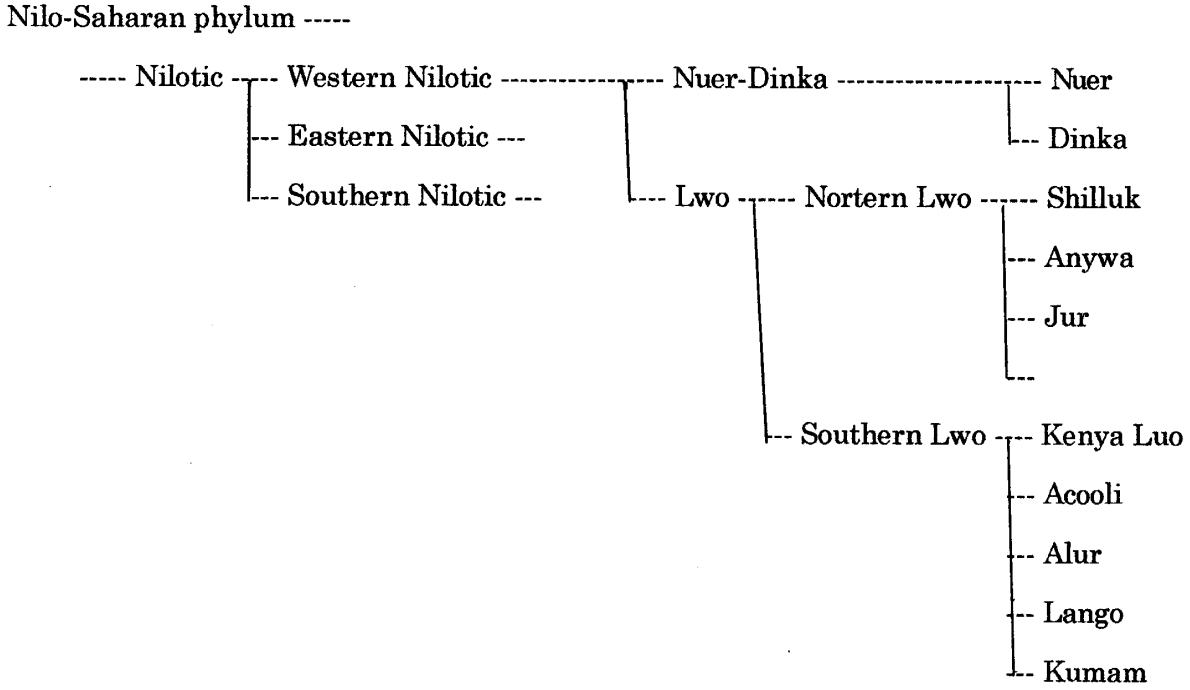
１．序 － 分布、話者数、分類、起源 －

クマム Kumam 語は、ウガンダ中部、カベラマイド Kaberamaido 郡、ソロティ Soroti 郡、セレレ Serere 郡とキヨガ Kioga 郡において話されている。クマム語を話す人々は、東にテソ Teso 語を話す人々と、西にランゴ Lango 語を話す人々と接している。言語学的な分類では、テソ語はナイル諸語 Nilotic Languages を構成する東ナイル方言群 Eastern Nilotic に所属し、クマム語とランゴ語は、ナイル諸語を構成する西ナイル方言群 Western Nilotic に所属している。したがって、クマム語とランゴ語は、テソ語とは系統的にはすこし離れている。また、言語構造的にもテソ語と、クマム語とランゴ語のあいだには違いが存在するにもかかわらず、クマム語を話す人々とテソ語を話す人々とランゴ語を話す人々は、総称してアテケリン Atekerin と呼ばれる。すなわち、クマム語とランゴ語は、互いの言語構造が類似しており、相互に理解が可能と考えられるが、一方、クマム語、ランゴ語の両言語とテソ語のあいだでは互いの理解が容易ではないと考えられる。しかし、それにもかかわらず、これら３つの言語を話す人々は、１つの社会集団とみなされるのである。クマム語の話し手の数は、古い資料によると約５万５千人と書かれているが、現在は、１１２，６２９人という数字もある1)。

歴史学者たちは、クマム語の話し手はおおよそ紀元１６００年頃、彼らが現在、住んでいる地域から北東にあたるエチオピアから、今、彼らが居住する地域へ移動してきたと考えている。クマム語の話し手は、かつてはランゴと呼ばれていた。実際、クマム語の語彙のなかにランゴという名前が保持されている。また、スーダン南部で話されている東ナイル方言群に所属するロツホ Lotuxo 語の地域変種のなかにランゴ方言と呼ばれる変種が存在することからわかるように、ランゴという名前は、本来はウガンダから北東にあたるエチオピアやスーダンに起源があると考えられる。また、クマムという名前は、カリモジョン Karimojong 語を話す人々がテソ語、ランゴ語、クマム語を話す人々を総称して呼ぶときの名前、クママ Kumama と関連があると考えられている。また、クマムという名前は、ランゴを話す人々がテソ語を話す人々とランゴ語を話す人々を総称して呼ぶときの名前、アクム Akum から由来すると一般に考えられている。

クマム語は、ナイル・サハラファイラム Nilo-Saharan phylum のなかのナイル諸語に所属する。ナイル・サハラファイラム内の下位分類については、エーレト Ehret による分類の試みやベンダーBender による分類の試みがあるが、まだ結論がでていない。しかし、おおよその研究者が同意しているグリンバーグの分類によると、ナイル諸語は、西ナイル方言群と東ナイル方言群と南ナイル方言群 Southern Nilotic に下位分類される。そして、クマム語は、そのなかの西ナイル方言群に属する。西ナイル方言群内の下位分類は、十分な資料がないマバン Mabaan 語の分類をのぞいて、ほぼ確定している。西ナイル方言群は、ヌエル・ディンカ語グループ Nuer-Dinka とルオ方言群 Lwo に下位分類される。さらに、ルオ方言群は、北ルオ方言群 Northern Lwo と南ルオ方言群 Southern Lwo に分類される。クマム語は、南ルオ方言群に所属する（図１）。図１は、西ナイル方言群の分類である。ただし、マバン語の分類については図１に示していない。

図１　西ナイル方言群の分類



クマム語は、音韻論的構造や形態論的構造や統語論的な構造においては西ナイル方言群、南ルオ方言群の特徴をもっているが、その一方で、クマム語の語彙体系のなかには、「クマム語は、3 分の２はルオ語で、3 分の 1 はテソ語である」と形容されるように、東ナイル方言群の特徴をもつ語彙形式が少なからず存在する。とくに氏族の名称や、儀礼にかんする語彙や、儀礼に

用いられる道具類の名前や、儀礼で踊られるダンスの名前などに東ナイル方言群の言語の特徴をもつ語彙形式が観察できる2)。クマム語を話す人々がかつては東方言群に属する言語を話し、現在の地域に移動の後に、かれらが東ナイル方言に所属する言語を話すのをやめ、西方言群に所属する言語に言語交替をおこなったと考えられている。ケラーKoehler は、クマム語は、テソ語を起源にすると考え、クマム語を話す人々が西へ移動したのは１８世紀のことであると考えている(Vossen, 1982:66)。また、ローランス Lawrance は、テソ語を話す人々とクマム語を話す人々が分かれたのは１９世紀の初めであると述べている(Lawrance, 1957:15)。現在、話されているクマム語のなかに見られる東ナイル方言群の特徴をもつ語彙形式が、かれらのもともと話していた東ナイル方言群に所属する言語に由来するものであるか、あるいは、かれらが最近になってテソ語を話す人々と接触したために、テソ語から借用したものであるかについては、明確な結論はえられていない。クマム語の話し手がかつて東ナイル方言群の言語を話していたのか、また、その言語は、いかなる言語であったかをも含めて、これらの問題については将来の検討にゆだねる必要がある。

クマム語は、語彙体系のなかに東ナイル方言群の特徴をもつ形式が存在することをのぞけば、音韻論的、形態論的、統語論的な構造においては西ナイル方言群のなかのランゴ語ときわめてよく似ていることはあきらかである。

２．言語構造 － 書記法 －

クマム語は、いまだ十分に研究、記述されていない。また、出版された記述もない。そこで、この章ではクマム語における動詞の意味的分類を議論するのに必要なだけの言語構造上の情報を記述するにとどめる。まず、子音体系ならびに母音体系からなる音素体系を概観する。また、この論文で用いる書記法について解説する。

クマム語において、アスペクトは声調のみによって表示される。アスペクトは、動詞を分類する上で、動詞の意味と切り離せないことから、時制・アスペクト構造と関連するかぎりにおいて、声調体系の分析を試みる。

２．１．子音体系

クマム語は、比較的、単純な子音体系をもっている。その子音体系は、両唇と歯茎と硬口蓋と軟口蓋の４つの調音点と、閉鎖音と摩擦音と側面音とふるえ音と鼻音と半母音からなる６つの調音法の組み合わせからなる。閉鎖音は、無声と有声の対立をもっている。クマム語においては、摩擦音の数はきわめて少ない。これは、西ナイル方言群に所属するすべての言語の子音体

系に共通する特徴である。そして、クマム語には、たった１つの摩擦音、歯茎摩擦音/s/のみが観察される（表１）。

表１ クマム語の子音体系

	Bilabial	Alveolar	Palatal	Velar
Stop	p	t	c	k
	b	d	j	g
Fricative		s		
Lateral		l		
Trill		r		
Nasal	m	n	ny	ng'
Semi-vowel	w		y	

この論文においては、便宜的に、硬口蓋鼻音は、ny で、軟口蓋鼻音は ng'で表記する。

２．２．母音体系

クマム語の母音体系は、１０の母音からなり、それらの母音は、母音調和にかんして、２つのグループに分かれる。この２つのグループは、舌根の位置 Tongue Root によって特徴づけられる。１０の母音は、５つの[-Advanced Tongue Root]母音と、５つの[+Advanced Tongue Root]母音からなる。母音調和においては、[+ATR]母音が支配的な母音である。つまり、１つの語において、語を構成する形態素が[+ATR]母音をもてば、語を構成する他の要素の母音も[+ATR]母音をもつことになる。逆に、[-ATR]母音は語を構成する他の母音に影響をあたえることはない。５つの[-ATR]母音と５つの[+ATR]母音は、それぞれ、前舌高母音と前舌中母音と低母音と後舌高母音と後舌中母音からなる（表２）。母音は、長短の音韻論的弁別をもっている。

表２．クマム語の母音体系

	Front	Back	Front	Back
High	I	U	i	u
Mid	E	O	e	o
Low	A		a	
	[-ATR]		[+ATR]	

[-ATR]母音は、便宜上、大文字アルファベット I,E,A,O,U で表記する。[+ATR]母音は、小文字アルファベット i,e,a,o,u で表記する。また、長母音は、アルファベット 2 文字の連続、II,EE,AA,OO,UU,ii,ee,aa,oo,uu で表記する。

２．３．声調

声調は、音声学的には５つの声調が観察される。高声調 high tone と低声調 low tone とダウンステップされた高声調 down stepped high tone と下降声調 falling tone と上昇声調 rising tone である。しかし、音韻論的には２つの声調素、高声調素 high toneme と低声調素 low toneme、だけを認めるだけで十分である。２つの声調素により音声学的な５つの声調を説明することができる。

ダウンステップされた高声調は、高声調の前に先行する、しかも、音節と結びついていない浮き低声調素 floating low toneme により説明できる。高声調素が浮き低声調素に先行されるとき、高声調素は、本来の高さより若干、低く調音される。これをダウンステップされた高声調と呼ぶ。また、下降声調は、高声調素と低声調素の連続として、また、上昇声調は、低声調と高声調素の連続として解釈できる（表３）。

表３ クマム語の声調体系

High Tone （ ´ ）

Low Tone （ ）

Down stepped High Tone (Floating Low Toneme + High Toneme) （ ˈ ）

Falling Tone (High Toneme + Low Toneme) （ ^ ）

Rising Tone (Low Toneme + High Toneme) （ v ）

音声学的な５つの声調は、表３の記号を使用して、表記するが、低声調は、記号をつけないことで表記する。この論文は、声調体系を明らかにすることを目的にしていない。したがって必要でない限り声調については、表記しない。しかし、声調がアスペクトを表示するのに重要な役割をはたすので、アスペクト体系を説明するためにのみ声調の分析を試みる。なぜなら本論が目的とする動詞の意味は、アスペクトと切り離して考察できないからである。

２．４．時制・アスペクト・法

クマム語の動詞複合体は、かならず、アスペクトの区別を表示される。そして、アスペクトは、

2 つのアスペクト、すなわち、完了アスペクトと未完了アスペクトが区別される。しかも、アスペクトは、声調のみによって表示される。完了アスペクトと未完了アスペクトの２つのアスペクトを区別するのは、ナイル・サハラファイラムにおいて広く観察される特徴である。

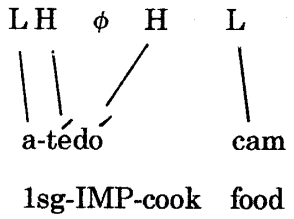
時制は、周辺的な形態論的要素、すなわち、助動詞や時を表す副詞によって表示される。論理的にはあらゆる時制にたいして、たとえば、過去時制において過去完了アスペクトと過去未完了アスペクトのように、それぞれ、完了アスペクトと未完了アスペクトが存在する。法は、たとえば、接続法が動詞語幹に接辞される接尾辞によって表示される。この論文ではアスペクト体系についてのみ若干の説明をおこなう。なぜなら、動詞の意味を考察するうえで、あとの議論を理解するためには、アスペクトについてあらかじめ議論しておかなくてはならないからである。

完了アスペクトは、主語の接頭辞と動詞語幹のあいだに挿入された低声調素によって表示される。（１ｂ）の文では、完了アスペクトを表示する声調素は、左から 3 番目の低声調素（L）にあたる。それにたいして、未完了アスペクトは、主語の接頭辞と動詞語幹のあいだに声調素が存在しないことがその特徴である。声調素が存在しないことがわかりやすいように、主語の接頭辞と動詞語幹のあいだにゼロ声調素を挿入しておく。（１ａ）の文では、未完了アスペクトを表示する声調素は、左から３番目のゼロ声調素（φ）である。

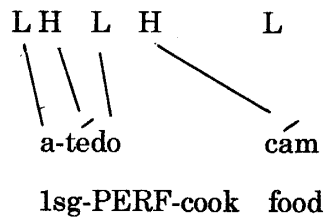
すべての動詞語幹は、かならず、高声調素（H）をもつので、語彙部門において動詞語幹の声調をとりわけ記述しておく必要はない。

動詞複合体にはかならず主語の接頭辞が動詞語幹の前に接辞されなくてはならない。そして、主語の接頭辞は、低声調素と高声調素の連続（LH）をもっている。たとえば、クマム語の話し手に 1 人称・単数の接頭辞をゆっくり発音することを要求すると、クマム語の話し手はその接頭辞を、上昇声調をともなって調音する。したがって２．３で述べたように上昇声調は、基底形として低声調素と高声調素の連続と解釈できるので、1 人称・単数の主語接頭辞に基底形として低声調素と高声調素を付与する。そうすると（１ａ）における動詞複合体に付与される声調素は、低声調素－高声調素－ゼロ声調素－高声調素（L－H－φ－H）の連続ということになる。一方、（１ｂ）における動詞複合体に付与される声調素は、低声調素－高声調素－低声調素－高声調素（L－H－L－H）の連続ということになる。

(1a) 未完了アスペクト



(1b) 完了アスペクト



（１ａ）と（１ｂ）の例において、左から順に声調素を音節に付与してゆくと、期待された音声学的な声調の表示をえることができる。音節に声調素を付与するやり方は、（１ａ）と（１ｂ）における声調素と音節をつなぐ線によって表現する。ちなみに、（１ａ）と（１ｂ）の文における目的語 cam 'food'は、基底形に低声調素をもっている。また、（１ｂ）において声調素と音節を左から順に付与していくと、動詞複合体が本来もっていた声調素連続の最後の高声調素は、付与されるべき音節が動詞複合体のなかには足りなくなる。それで、その高声調素は、後続する目的語の音節に付与される。事実、（１ｂ）の文では、目的語 cam 'food'は高声調で調音される。クマム語では高声調が優先的に音節に付与されるからである。左から順に声調素を音素に付与していくと、（１ｂ）では最後に低声調素が、音節に付与されずに残ってしまう。この低声調素は、浮き声調となって、後に後続する声調に影響を与えることになる。

声調体系の基本的規則は、左から順に声調素が音節に付与されることと、高声調素が優先的に音節に付与されることである。低声調素は、音節に付与されることなく、浮き声調になることがある。

２．５．語順、動詞複合体の構造

文における語の文法関係、あるいは、意味的役割は、語順によって表示される。語順は、クマム語においてかなり厳密に守られる。主語（S）が動詞（V）の前に先行する。目的語（O）は、動詞の後に置かれる。主語は、義務的な要素である。また、あとの議論で詳しく論じるが、目的語もクマム語の他動詞文においてはかなり厳密的な義務的要素である。主題 Topic の位置は、文の先頭にある。受益者 Benefactive は、動詞のすぐ後ろに後続する。このとき、動詞は、受益者語幹の形式でなければならない。直接目的語（DO）は、受益者の後に後続する。前置詞句 Prepositional Phrase は、直接目的語の後ろに後続する。最後に、時間や場所を表現する副詞句 Adverbial Phrase が、前置詞句の後に後続する（図２）。

図２ クマム語の語順

(Topic) S V (Benefactive) (DO) (Prepositional Phrase) (Adverbial Phrase)

主語の接頭辞 Subject Prefix は、動詞複合体を構成する義務的要素である。また、クマム語は、非人称表現をもたないので、動詞語幹 Verb Stem は、1 人称、2 人称、3 人称、それぞれの単数か複数の人称接頭辞のうち、どれかがかならず接辞される。他動詞文の場合には、目的語の接頭辞 Object Prefix が動詞語幹に接辞されることがある。しかし、自立的な目的語名詞句が動詞に後続するとき、目的語の接尾辞は、かならずしも義務的ではない（図３）。未完了アスペクトのとき、さらに、動詞が自立的な主語名詞句によって先行される場合に、3 人称の主語接頭辞は、ゼロ形態素となる。たとえば、（２）において、動詞 nEn 'to see'は、自立した主語名詞句 Stella 'a female name'によって先行されるので、3 人称・単数の主語接頭辞は、未完了アスペクトではゼロ形態素である。また、（２）の文では 1 人称・単数の目的接頭辞 - A が動詞語幹に接辞されている。

図３ クマム語の動詞複合体構造

Subject Prefix – Verb Stem – (Object Prefix)

(2) Stella nEn-A

Stella 3sg-IMP-see-1sg

'Stella sees me.'

３．クマム語の他動詞・中動相・自動詞

この論文は、クマム語の動詞をその意味から分類することを目的としている。クマム語の動詞の意味を探るために中動相 Middle に注目する。なぜなら、クマム語の統語論において中動相は、重要な役割をもっているからである。中動相は、クマム語において動詞がとれる項の数 Valency を減らすための唯一の統語論的装置である。なぜなら、クマム語は受動相 Passive をもっていない。また、クマム語のたいていの他動詞 Transitive は、自動詞的用法 Intransitive Usage をもっていない。すなわち、クマム語の他動詞は、少なくとも２つの関与者 Participant、すなわち、主語と目的語をもつことが強く要求される。

(3a) A-nEnO AtIn (Transitive)

1sg-IMP-see child

'I see a child.'

(3b) *A-nEnO (Transitive)

1sg-IMP-see

'I see.'

(3c) a-ted-e (Transitive)

1sg-IMP-cook-3sg

'I cook it.

たとえば、(3a) において他動詞 nEnO は、主語に 1 人称・単数を、また、目的語に名詞句 AtIn 'child'をもつ。(3a) の文にたいして、同じ動詞を使って、ただし、目的語をもたない文、すなわち、他動詞の自動詞的用法の文を無理につくると、(3b) の文ができあがる。しかし、これは非文法的な文になる。クマム語の話し手は、(3b) のような、目的語をもたない他動詞文は許されないと答える。ただし、たとえば、英語における、'Do you see a child?' 'Yes, I see.' にあたるような、疑問文にたいする答えとしてのみ目的語をもたない他動詞文を、クマム語の話し手は許容する。しかし、そのような文を許容することは、クマム語の話し手にとってかなりの抵抗であることは留意しなければならない。

そこで、目的語になんら特別な言及をおこなわない、すなわち、行為のみに聞き手の注意をむける文をつくりたいとき、クマム語では 3 人称・単数の目的語接尾辞-E を動詞に接辞した文を用いなければならない。すなわち、(3c) の文が、英語における他動詞の自動詞的用法の文 'I am cooking.'や'I cook.'にほぼ等価な文になる。このように、クマム語の他動詞は、少なくとも 2 つの項をとることを強く要求することは明らかである。

さほど多くはないけれど、若干の数の他動詞は、対をなす自動詞 Intransitive をもっている。たとえば、他動詞 nEnO 'to see'もまた、対をなす自動詞をもつ他動詞の一つである。

(4) AtIn neeno (Intransitive)

child 3sg-IMP-see

'The child is visible.'

（4）の文は、自動詞 neeno 'to be visible'をもっており、この自動詞は、他動詞 nEnO 'to see' と対になっている。この自動詞は、他動詞 nEnO 'to see'から母音の長さと[±ATR]の値をかえることでつくられている。また、（4）の文の主語 AtIn 'child'は、他動詞文（3a）の目的語にあたる。したがって、（4）の文は、英語における他動詞の自動詞的用法の文 'I can see.' にあたるような、他動詞 nEnO 'to see'を用いた他動詞の自動詞的用法ではないといえる。クマム語における他動詞と自動詞の関係は、あとで考察することにして、ここではクマム語の中動相の定義をおこなっておこう。なぜなら、中動相という用語は、さまざまな研究者によって、さまざまな言語において、さまざまな範疇にたいして使われており、そのため、正確な定義なしでは使うことはできないと考えられるからである。

他動詞、nEnO 'to see'は、中動相の形式をも、対としてもっている。ここで注意しなければならないのは、クマム語においてすべての他動詞が対として中動相の形式をもっているわけではないことである。すなわち、中動相の形式は、形態論的には生産的に他動詞語幹から形成されるが、すべての他動詞語幹から中動相の形式がつくれるわけではない。結論をさきどりして言うと、動詞の意味により中動相の形式がつくれたり、つくれなかったりする。

形態論的に、中動相の形式は、動詞語幹に形態素-ErE が接辞されてつくられる。この形態素のなかの母音は、動詞語幹の母音に母音調和をおこなう。もし先行する動詞語幹が[+ATR]の母音をもてば、中動相をつくる形態素の母音 E は、母音調和して、[+ATR]母音 e になる。

(5) AtIn O-nEn-ErE (Middle)
child 3sg-PEF-see-Mid
'The child has been seen (by someone).'

（5）において、動詞語幹 nEn に中動相の形式をつくる形態素-ErE が接辞されて、動詞は、中動相の形式になっている。また、完了アスペクトのときに用いられる 3 人称・単数の主語接頭辞 O-が、主語 AtIn 'child'と照応して、接辞されている。中動相の形態素は、そのあとに（3c）でみられたような直接目的語の接尾辞などによって後続されることはない。この論文では、形態素-ErE をもつ動詞でなりたっている文を中動相文と呼ぶ。また、形態素-ErE をもつ動詞形式を中動相語幹と呼ぶ。このようにこの論文であつかう中動相は、形態・統語論的な中動相をあつかうのであって、意味論的な中動相をあつかうのではない。

まず初めに興味を引くクマム語における中動相の特徴は、中動相文の主語がそれと対をなす他

動詞文における直接目的語と対応する場合と、中動相文の主語がそれと対をなす他動詞文における主語と対応する場合があることである。

たとえば、（5）の文は、動詞語幹 nEn に中動相をつくる形態素-ErE が接辞された中動相語幹からなる動詞を中心にもつ中動相文である。（5）の文と対をなす他動詞文は、（3a）である。（5）の文の主語 AtIn 'child'は、（3a）の他動詞文の目的語と対応している。この論文では、中動相文の主語が他動詞文の目的語と対応するタイプを中動相タイプ１と呼ぶことにする。

(6) winyo lIkA cIk-ErE (Middle)
bird not 3sg-IMP-trap-Mid
'The bird cannot be trapped.'

(7a) a-yeto IcUO (Transitive)
1sg-IMP-abuse man
'I abuse a man'

(7b) a-yet-ere (Middle)
1sg-IMP-abuse
'I abuse.'

（７ｂ）は、動詞語幹 yet に中動相をつくる形態素-ErE が接辞された中動相語幹からなる動詞をもつ中動相文である。（７ｂ）の主語は、１人称・単数であり、（７ｂ）と対をなす他動詞文（7a）の主語と対応する。中動相文の主語が対をなす他動詞文の主語と対応するタイプを中動相タイプ２と呼ぶ。

クマム語の他動詞のなかには中動相タイプ１のみを対にもつ他動詞と、中動相タイプ２のみを対にもつ他動詞がある。また、ほんのわずかな他動詞は、中動相タイプ１と中動相タイプ２の両方を対にもつことがある。この論文の目的の一つは、どのような動詞が中動相を対にもつか、どのような動詞が中動相を対にもたないかを検討することである。また、中動相を対にもつ他動詞のなかで、どのような動詞が中動相タイプ１を対にもつか、どうような動詞が中動相タイプ２をもつか、また、どのような動詞が中動相タイプ１とタイプ２の両方を対にもつかを考察することである。そして、これらの動詞のグループを決定する意味的特徴を探し出すことである。

このテーマを議論するまえに、中動相文と自動詞文のあいだの機能的な、また、意味的な違いを検討しておく。（4）の文は、他動詞 nEnO と関係する自動詞語幹 neeno からなる動詞をもつ自動詞文である。一方、（5）の文は、動詞語幹 n En に中動相をつくる形態素-ErE が接辞された中動相語幹からなる動詞をもつ中動相文である。これら自動詞文と中動相文は、同一の他動詞を介して、ほぼ等価の文であると考えられる。しかし、意味的にはこれら 2 つの文には、はっきりとした違いが存在する。（4）の自動詞文は、自発的な出来事 spontaneous event を表現しており、なんら行為者 agent の存在を含意しない。一方、（5）の中動相文は、不特定な行為者によって引き起こされた出来事の状態 state of event を表現する。すなわち、（5）の文は、AtIn「子供」を nEnO「観察する」何者かが存在することを前提 presupose とする。したがって、（5）の文は、「子供」を「観察」する何者かが存在しなければ、論理的に不適格な文になる。中動相文は、行為者の存在を前提とするのである。その結果として、中動相文は、中動相タイプ１の場合に語用論的には受動文と等価の文として機能する。なぜなら、他動詞文の目的語が、中動相タイプ１の場合、中動相文の主語のスロットを埋めるからであり、また同時に、行為者が分節的には表現されないけれども存在することが前提とされるからである。

他動詞文において主語のスロットを埋める外部原因者 Causer が不特定なものであり、また、他動詞文の目的語のスロットを埋める受動作者 Patient とくらべて重要でないとき、主語は、語用論的に脱強調される。その結果、中動相文が用いられる。なぜなら、中動相文では原因者、すなわち、行為者が分節的に表現されず、たんに存在することが前提となるだけだからである。たとえば、ドイツ語の中動相文'Dieses Buch liest sich gut. (This book reads well.)'において、本を読んでいるのは、人間であるが、人間は、文中で分節的に表現されていない。しかし、本を読む人間が存在することは、認識されている。

中動相タイプ２の動詞は、再帰的 reflexive、あるいは、相互的 reciprocal な意味をもっている。その理由は、つぎのように考えられる。

中動相文は、議論したように、本来は他動詞文の目的語のスロットを埋める受動作者に焦点をあてるために、相対的に重要でない行為者を分節的に表現しない文である。したがって、中動相文において主語のスロットを埋めるのは、本来は受動作者であるはずのものである。しかし、中動相タイプ２においては、中動相文と対をなす他動詞文の主語が、中動相タイプ２の文においても主語のスロットを埋める。また、他動詞文の主語は、原因者、あるいは、行為者であることが望まれるから、したがって、受動作者と原因者が中動相文では同時に主語のスロットを埋めているかのようにみえる。すなわち、中動相タイプ２の文では、存在が前提とされる行為

者と主語のスロットを埋めている受動作者が同一指示的 co-referential であると考えられる。このように中動相タイプ２の動詞は、本来、再帰的な、あるいは、相互的な意味をもっている。

たとえば、他動詞文（７a）において受動作者 IcUO 'man'は、直接目的語のスロットを埋めており、主語のスロットを埋めているのは行為者である１人称・単数である。また、中動相文（７b）の主語を埋めているのは、対となる他動詞文の主語のスロットを埋めている１人称・単数である。うえで議論したように中動相文は、原因者が受動作者にくらべて総体的に重要でないときに、あるいは、原因者に注意が引かれないときに用いられる。したがって、中動相文の主語のスロットを埋めるのは、本質的には、原因者、あるいは、行為者ではなく、被原因者 Causee、あるいは、受動作者である。しかし、中動相タイプ２の文では、被原因者、あるいは、受動作者ではなく、原因者が、表層では主語のスロットを埋めている。その結果、中動相タイプ２の文において主語のスロットを埋める実在は、原因者と被原因者の２重の意味的役割をになうことになる。ここで再び強調しておかなければならないことは、中動相文と自動詞文の機能的な違いは、行為者が中動相文では分節的に表現されないが、存在することが前提となっているのにたいして、自動詞文では行為者が存在することが前提となっていないことである。

クマム語の多くの他動詞は、中動相タイプ１のみをもっており、タイプ２をもつ他動詞は多くない。中動相タイプ２をもたない他動詞を用いて、再帰的な、あるいは、相互的な意味をもつ文をつくるとき、クマム語の話し手は、名詞 kom 'body'を用いた再帰文をつくる（８）。

(8) A-kAnO kom-a (Reflexive)
1sg-IMP-hide body-my
'I hide myself.'

クマム語の中動相をつくる形態素-ErE は、ケニア・ルオ語で現在でも存在する動詞の再帰形をつくる形態素に由来すると考えられる3)。しかし、クマム語で再帰文は、（８）の文のように分析的構造の文を用いて表現され、動詞の再帰形を用いない。また、ケニア・ルオ語においては形態素-ErE を使った動詞の再帰形は、主語の人称・数に照応して形を変えるのにたいして、クマム語の形態素-ErE をつかった動詞の中動相の形式は、主語の人称・数にかかわらず不変化である。したがって、クマム語の中動相形態素は、再帰形をつくる形態素に由来するが、いまでは、再帰形としてではなく中動相の形態素に発展したと考える。

つぎに、中動相とアスペクトの関係について議論しよう。（５）の文は、完了アスペクトをも

った中動相文である。中動相文が完了アスペクトで用いられるとき、文は、出来事の状態 state of events を表現する。（6）の文は、未完了アスペクトをもつ動詞からなる中動相文である。中動相動詞 cIk-ErE は、主語 winyo 'bird'と照応しているが、未完了アスペクトにおいて３人称・単数の主語は、ゼロ標識で表示される。中動相文が未完了アスペクトで用いられるとき、文は、出来事の実現可能性 potentiality of events を表現する。（6）の文は、「鳥」を捕まえることの実現可能性について言及しており、おそらくは、「鳥」があまりに賢明で人間には捕獲できないことを述べている。

クマム語の中動相文は、本来的に完了アスペクトにおいて出来事の状態、あるいは、未完了アスペクトにおいて出来事の実現可能性を表現する。これらのクマム語中動相の意味的特徴は、中動相の一般的特徴と一致している。中動相の一般的な特徴とは、中動相は、行為、あるいは、状態が動詞の主語に、あるいは、主語の関心に関与することを表現するのであるから、中動相は、主語の意図的な行為を表現するのではなく、動詞の主語に生じる状態変化を表現するということである。実際、さきに例示したドイツ語の中動相文 'Dieses Buch liest sich gut.'は、容易さ、あるいは、困難さの表現、すなわち、一種の実現可能性を含んでいることは興味深い。

中動相文は、本来的に、出来事の状態性、あるいは、出来事の実現可能性と意味的な関連をもっているから、したがって、逆に意味的に状態性や実現可能性を含まない出来事や行為を中動相文で表現することはできない。これは、中動相文の重要な意味的特徴である。

次に、他動詞と自動詞の関係について少し、議論しておく。すでに述べたように、すべての他動詞が対として中動相の形式をもつことはできない。ある他動詞は、中動相の形式とではなく、自動詞の形式と対をつくることがある。

（9a）　A-gIgIrO　　ItAbU　　(Transitive)
　　1sg-IMP-write　　book
　　'I write a book.'
（9b）　ItAbU　　o-gigirun　　(Intransitive)
　　book　　3sg-PERF-write:Intr.

（9a）の文は、他動詞 gIgIrO 'to write'からなっており、他動詞は、直接目的語 ItAbU 'book' によって後続されている。（9ｂ）の文は、（9a）の文と対をなす自動詞文である。注意しなければならない事実は、自動詞文の主語はときには対となる他動詞文の目的語と対応することも

あるが、ときには、対となる他動詞文の主語と対応するという事実である。この現象は、中動相文における現象と極めて似ている。たとえば、自動詞文（９ｂ）の主語 ItAbU 'book'は、対となる他動詞文（9a）の目的語 ItAbU 'book'と対応している。一方、自動詞文（１０ｂ）の主語、１人称・単数は、対となる他動詞文（１０a）の主語、１人称・単数と対応している。

(10a) a-ng'ong'olo Ot (Transitive)
1sg-IMP-look around house
'I look around a house.'

(10b) a-ng'ong'olun (Intransitive)
1sg-IMP-look around
'I look around.'

自動詞文の主語が、それと対をなす他動詞文の目的語と対応する場合、その自動詞を自動詞タイプ１と呼ぶ。一方、自動詞文の主語が、それと対をなす他動詞文の主語と対応する場合、その自動詞を自動詞タイプ２と呼ぶことにする。中動相について議論したときと同様に、ある他動詞は、自動詞タイプ１のみを対にもつ。若干の他動詞は、自動詞タイプ２を対にもつ。また、たった１つの他動詞が対として自動詞タイプ１と自動詞タイプ２の両方をもつことができる。

それでは、ここで他動詞と中動相との関係と、他動詞と自動詞の関係をまとめる（表４）。

表４ 他動詞・中動相・自動詞

他動詞文 :	S	V	DO
中動相文タイプ１・自動詞文タイプ１ :	S（=DO)	V	
中動相文タイプ２・自動詞文タイプ２ :	S（=S)	V	

中動相文タイプ１と自動詞文タイプ１における主語は、それらに対となる他動詞文の目的語と対応する（S（=O))。中動相文タイプ２と自動詞文タイプ２における主語は、それらと対をなす他動詞文の主語と対応する（S（=S))（表４)。つまり、形態論的には同じ形式をもつ動詞が、動詞がもともともっている意味的特徴にしたがって、文において項に異なった意味役割を与えると考えられる。

すでに述べたように、ある他動詞は対として中動相の形式をもつ場合と、ある他動詞は、対と

して自動詞の形式をもつ場合とが存在する。しかし、もちろんクマム語には、対として他動詞も、中動相の形式ももたない自動詞文だけで用いられる動詞も存在する。また、クマム語は、対として中動相の形式や自動詞の形式をもたない他動詞文だけで用いられる動詞をもっている。さらに、ほんのわずかな数であるが、クマム語は、形態論的に中動相の形をした形式のみをもつ動詞をもつ。これらの動詞の分類と、表４でまとめた他動詞と中動相、自動詞の関係、すなわち、中動相タイプ・自動詞タイプを考慮して、動詞を分類すると表５になる。

表５ 動詞のクラス

（１）自動詞のみ……クラス１（１７３）

（２）他動詞

（ａ）他動詞－中動相

(あ) S（=O）……クラス２（２７８）

(い) S（=S）……クラス３（４５）

(う) S（=O）&S（=S）……クラス４（２１）

（ｂ）他動詞－自動詞

(あ) S（=O）……クラス５（２５）、クラス５ｂ（４３）

(い) S（=S）……クラス６（4）、クラス６ｂ（3）

(う) S（=O）&S（=S）……クラス７（0）、クラス７ｂ（1）

（ｃ）他動詞－中動相－自動詞

(あ) S（=O）……クラス８（２１）、クラス８ｂ（1）

(い) S（=S）……クラス９（3）

(う) S（=O）&S（=S）……クラス１０（1）

（３）中動相のみ……クラス１１（5）

（４）他動詞のみ……クラス１２（９７［３４］）

クラス１に所属する動詞は、形態論的にも自動詞のみの動詞であり、対として中動相の形式も他動詞の形式ももたない。本調査者が集めた語彙集のなかには１７３のクラス１動詞が存在する。クラス２動詞は、対として中動相の形式をもつ。そして、中動相文の主語が対としてもつ他動詞文の目的語と対応する。すなわちこのクラスの動詞の中動相動詞語幹は、中動相タイプ１の文をつくる。このクラスの動詞には、２７８の動詞がある。クラス３動詞は、対として中

動相の形式をもつ。ただし、中動相文の主語は、対をなす他動詞文の主語に対応する。すなわち、このクラスの中動相動詞語幹は、中動相タイプ２の文をつくる。このクラスの動詞の数は、４５である。クラス４動詞は、対として中動相の形式をもつ。ただし、中動相文の主語は、対をなす他動詞文の目的語と対応する場合と、対をなす他動詞文の主語と対応する場合の両方が同時に許容される。すなわち、クラス４動詞でつくられた中動相語幹は、中動相タイプ１と中動相タイプ２の両方の文をつくることが可能である。クラス４動詞の数は、２１である。クラス５動詞とクラス５ｂ動詞は、対として自動詞の形式をもつ。中動相の形式を対としてもたない。このクラスの動詞でつくられた自動詞文の主語は、対をなす他動詞文の目的語に対応する。すなわち、このクラスの動詞の自動詞語幹は、自動詞タイプ１の文をつくる。クラス５ｂ動詞は、すべてが他の動詞語幹から生産的に派生された動詞語幹か、または、他の動詞語幹、あるいは、その一部を重複してつくられた動詞語幹である。クラス５動詞とクラス５ｂ動詞の数は、それぞれ、２５と４３である。クラス６動詞とクラス６ｂ動詞は、対として自動詞の形式をもつ。中動相の形式をもたない。このクラスの動詞でつくられた自動詞文の主語は、対をなす他動詞文の主語に対応する。すなわち、このクラスの動詞の自動詞語幹は、自動詞タイプ２の文をつくる。クラス６ｂ動詞は、派生動詞か重複によりつくられた動詞語幹である。クラス６動詞とクラス６ｂ動詞の数は、それぞれ、４と３である。クラス７ｂ動詞は、対として自動詞の形式をもつ。中動相の形式はもたない。このクラスの動詞でつくられた自動詞文の主語は、対としてもつ他動詞文の目的語と対応する場合と、主語と対応する場合の両方が許容される。すなわち、このクラスの動詞の自動詞語幹をつかって、自動詞タイプ１と自動詞タイプ２の両方の文をつくることが可能である。クラス７ｂ動詞は、他の動詞から生産的につくられた派生動詞である。たった１つの動詞だけがクラス７ｂを構成している。派生動詞や重複による動詞語幹以外にこのクラスに属する動詞はない。クラス８動詞とクラス８b 動詞は、対として中動相の形式と自動詞の形式の両方をもつ。このクラスの動詞をつかった中動相文と自動詞文の主語は、対をなす他動詞文の目的語に対応する。すなわち、このクラスの動詞の中動相語幹と自動詞語幹による中動相文と自動詞文は、中動相タイプ１と自動詞タイプ１の文である。クラス８動詞とクラス８ｂ動詞の数は、それぞれ、２１と１である。クラス９動詞は、対として中動相の形式と自動詞の形式の両方をもつ。クラス９動詞をつかった中動相文と自動詞文の主語は、対をなす他動詞文の主語と対応する。すなわち、クラス９動詞の中動相語幹と自動詞語幹による中動相文と自動詞文は、中動相タイプ２と自動詞タイプ２の文である。クラス９動詞の数は、３である。クラス１０動詞は、たった１つの動詞から構成されている。クラス１０動詞は、対

として中動相の形式と自動詞の形式の両方をもっている。また、クラス１０動詞をつかった中動相語幹と自動詞語幹による中動相文と自動詞文の主語は、対となる他動詞文の目的語と主語の両方に対応する。すなわち、クラス１０動詞は、中動相タイプ１と自動詞タイプ１の文、さらに、中動相タイプ２と自動詞タイプ２の文を許容する。クラス１１動詞は、中動相の形式だけをもっていて、対をなす他動詞の形式が存在しない。クラス１１動詞の数は、５である。クラス１２動詞は、他動詞文のみで用いられる。すなわち、このクラスの動詞は、かならず目的語を要求する。また、対として中動相文や自動詞文を許容しない。クラス１２動詞の数は、９７である。しかし、このクラスに属する動詞のうち３４は、他の意味で使われるとき別のクラスに所属する。

ここでクマム語において中動相を提案する理由をまとめる。１）クマム語において中動相語幹は、形態論的には生産的につくられるが、すべての動詞が中動相語幹をもつのではない。この事実は、表５から明らかである。２）中動相は、動詞がとれる項の数を減らす統語論的装置として、クマム語では重要な役割をはたす。なぜなら、クマム語は、受動相をもっていない。３）中動相文は、ときには、語用論的に受動文と等価である。また、中動相文は、ときには、動詞が本来もっている意味にしたがって、意味的に再帰文や相互的な意味をもつ文と等価である。４）多くの動詞が中動相語幹をもつ。

４．動詞分類の意味的特徴

第３章においてクマム語の動詞を形態統語論的特徴によって分類した（表５を参照）。この章では分類したそれぞれのクラスの動詞がどのような意味的特徴をもっているかを考察する。そして、なぜ動詞が第３章で議論したような統語論的ふるまいをするのかを、動詞が本来もつ意味から説明することを試みる。クマム語の動詞に英語の翻訳をつけるが、適当な意味を英語で説明することはきわめて困難である。しかし、ここでの動詞の意味を議論するには十分であると考える。

４．１．クラス１動詞（１７３）

クラス１動詞は、自動詞文でのみ使われ、決して直接目的語によって後続されない。クラス１動詞は、対として他動詞の形式をもたない。また、当然、中動相の形式をもたない。比較的に多くの動詞がクラス１に所属する。

(11a) a-bedo I-Ot (Intransitive)

1sg-IMP-stay at-home

'I stay at home.'

(11b) a-bedo Kampala (Intransitive)

1sg-IMP-stay Kampala

'I stay in Kampala.'

(11c) ** Kampala bed-ere (Middle)

Kampala 3sg-IMP-stay-Mid

'Kampala is suitable for staying.'

(11d) A-dOkO apwony (Intransitive)

1sg-IMP-become teacher

'I become a teacher.'

クラス１動詞は、前置詞句によって後続されることは可能である（１１a)。また、前置詞を必要としない場所をあらわす名詞句によって後続されることは可能である（１１ｂ)。前置詞句を構成する前置詞Ｉは,後続する名詞とハイフンで結合して記述する。なぜならこの前置詞の母音は、後続する名詞の母音に母音調和するから、前置詞句全体でひとつのまとまった構造を形成していると考えるからである。Kampala のような場所をあらわす固有名詞は、場所の前置詞を必要としない。

（１１ｃ）の文は、調査者が自動詞 bedo から無理に中動相の形式をつくって、作文した中動相文である。クマム語話者であるコンサルタントは、（１１ｃ）の文に英語で 'Kampala is suitable for staying.'という読みを与えた。しかし、クマム語話者は、（１１ｃ）の文を非文法的であると判断した。このように、自動詞は、対として中動相形をもたないと考えられる。

クラス１動詞を使った自動詞文は、補語をとることができる。（１１ｄ）の文では、apwony 'teacher'が補語であり、動詞に後続している。

４．１．１．クラス１動詞－派生動詞（２３）

クラス１動詞のなかには、他の動詞から由来する派生動詞と他の動詞を、あるいは、他の動詞の一部を重複して派生した動詞が含まれている。それらの数は、クラス１動詞１７３個中、それぞれ、５個と１８個である。

(12a) yer o-puputun (Intransitive)

feather 3pl-PERF-uprooted

'The feathers are uprooted (by themselves).'

(12b) a-puto dOI (Transitive)

1sg-IMP-uproot potato

'I uproot a potato.'

(12c) dOI o-put-ere (Middle)

potato 3sg-PERF-uproot-Mid

'The potato has been uprooted (by someone).'

(13) a-dany-akin (Intransitive)

1sg-IMP-get a bump

'I get a bump.'

自動詞文（１２a）の意味は、「鳥の羽がひとりでに抜け落ちる」ことである。誰も鳥の羽を抜かない。なぜなら自動詞文では、行為者の存在は前提となっていないからである。自動詞 puputun 'to be uprooted'は、他動詞 puto 'to uproot'の一部を重複して、さらに、語幹形成辞-un が接辞されて、つくられた自動詞語幹である。語幹の、あるいは、語幹の一部の重複によってつくられた派生動詞は、行為や出来事の繰り返しを意味する。クラス１に所属する派生動詞は、対として中動相の形式や他動詞語幹をもたない。とくに重複によって形成されたクラス１動詞は、けっして対として中動相の形式をもたない。なぜならすでに述べたように、中動相文は、意味的な含意として出来事の状態や出来事の実現可能性をもっている。一方、重複によってつくられたクラス１動詞は、行為や出来事の繰り返しを意味する。したがって、重複によってつくられるクラス１動詞の意味、すなわち、「出来事・動作の繰り返し」は、中動相文のもつ意味的含意、すなわち、「出来事の状態」と相反するがゆえに、重複によるクラス１動詞は、中動相を対としてもつことができない。

自動詞 puputun のもとになる他動詞 puto 'to uproot'は、後述するクラス２に所属し、中動相の形式 put-ere 'to be uprooted'を対としてもっている（１２ｃ）。

４．１．２．クラス１動詞の意味的特徴

クラス１動詞は、以下のような意味的特徴をもっている。クラス１動詞の意味的特徴は、多様であり、均質な意味的特徴にまとめることはできない。以下にクマム語動詞の例の意味的特徴

を、英語訳で例示する４)。

（１）内的な（心的、また、肉体的）経験 inner experiences : be shy, be mad, be tired, get angry

感情的な発話行為 emotive speech acts : pray, complain, shout, announce (about the death), whistle

意図しない知覚 unintentional perceptions : look toward, look around, stare

(14) a-juul (Intransitive)

1sg-IMP-feel sad

'I feel sad.'

（２） 行為者自身によってコントロールされない過程 uncontrolled processes、自発的出来事 spontaneous events : (body) swell, shiver, become numb, bloom, float, dry up, drop, spill out, rot, bear (fruits), ripen, reduce (water), grow

(15) kom-a O-myEl (Intransitive)

body-my 3sg-IMP-shiver

'My body shivers.'

（３） 動的な、ただし、自らが行為者である活動 self-agentive activities : go, come, jump, return, stroll, escape, visit, approach, come out, fall, run, enter, disappear, crawl, stagger, arrive, be away from

身体機能 body functions:snore, sneeze, yawn, cough, sleep, belch, breathe, break wind,

身体位置、姿勢の変化 change in body posture : sit down, bent over, step over, incline, crouch, get up, stay, stand up, face at, kneel down, lie down, hide (oneself)

(16) a-ryondiko (Intransitive)

1sg-IMP-kneel down

'I kneel down.'

（４） 自らを受益者とする活動 self-benefactive actions、あるいは、本来的に相互的な出来事

reciprocal events : make effort, work, warm (oneself), fan (one's body), accept, meet with, fight with, defend (oneself)

(17) a-yii kede IcUO (Intransitive)
1sg-IMP-fight with man
'I fight with a man.'

（5） 起動的過程 inchoative processes : become aged, become, become fat, prosper, get accustomed to, be similar to, be different from, die, be alive, be tired, become ferment

(18) a-puguno (Intransitive)
1sg-IMP-become fat
'I become fat.'

（6） 自然現象 natural phenomena : rain, thunder, become dirk, dawn

(19) kOt cwei (Intransitive)
rain 3sg-IMP-rain
'It rains.'

（7） 上記の動詞が表現する行為や出来事の繰り返し repetition of actions : coagulate, lose interest in, grow around, sweat, speak loudly, rain slightly, swarm, babble

クラス１動詞によって表現される行為や出来事は、ただ１個の関与者によって内的に、あるいは、外的に成し遂げられる。たとえば、クラス１動詞によって表現される発話行為 speech acts は、関与者の心理的内部での感情的な発話であり、聞き手や聴取者になんら意味ある情報を伝えない（感情的な発話行為)。また、クラス１動詞によって表現される発話行為は、情報を受け取る聞き手の存在が前提とならない。たとえば、人間が「叫ぶ」とき、なんらかの情報を受け取る聞き手の存在は必要としない。彼の「叫び」は、興味のない人にとってはなんら意味ある情報が含まれていない。（１４）の文は、関与者の精神的状態をあいまいに表現するだけであり、関与者にそのような精神的状態をもたらした特定の原因について言及するものではない。この

ように関与者は、ただ１個で十分である。

おなじように、クラス１動詞が表現する知覚行為は、意図的なものではなく、経験者 Experiencer のなかで成就し、完結する（意図しない知覚行為)。そのような知覚行為は、経験者にたいする刺激をなにひとつ内包しない。たとえば、人間が「あたりを見回す」とき、人間は意図的になにか特定のモノを見ているのではない。したがって、彼は、なにもモノを見ていないともいえる。

クラス１動詞が表現する自発的な出来事や動的な活動は、自らが行為者 self-agentive であることが特徴である（コントロールされない自発的出来事や活動)。クラス１動詞を使って表現する「落下」は、ものが「落下する」とき、それはひとりでに「落下」するのであり、「落下」をひきおこした原因者 causer についてはなんら言及しない。たとえば、（１５）の文では、「身体」は、「身体」自身を「ふるわせて」いるのであって、「身体」が「ふるえる」ことをひきおこす何者かについてはなんら言及していない。

クラス１動詞によって表現される姿勢の変化 change in body posture は、行為者から切り離すことが可能な身体の一部を使って成し遂げられるのではなく、身体全体を使ってなしとげられることが特徴である（身体の位置、姿勢の変化)。クラス１動詞を使って表現する「座る」は、「身体」全体をつかって「座る」を意味する。たとえば、（１６）の文では、「跪く」ために行為者は、「身体」全体を使っている。行為者から身体の一部は、切り離されない。

クラス１動詞が表現する自らを受益者とする活動と本来的に相互的活動は、行為者以外の他の関与者を必要としない（自らが受益者である活動)。なぜなら受動作者は、行為者と同一指示 co-referential の関係にあるからである。たとえば、（１７）の文は、本来的に相互的な出来事を表現している。なぜなら行為者は、「戦う」相手の存在なくしては「戦う」ことができない。「戦う」ことは一方的な行為ではなく、相互的な行為である。

最後に、クマム語は、英語 'It rains.'のような非人称表現をもたない（自然現象)。したがって、自然現象を表現する動詞は、文の主語に自然現象の名詞をとる必要がある。（１９）の文では、自動詞「雨が降る」は、名詞「雨」を文の主語としてとらなければならない。

４．２．クラス２動詞（２７８）

クラス２動詞は、対として中動相の形式をもつ他動詞からなる。このクラスに所属する動詞の数は、多い。クラス２動詞による中動相文の主語は、対となる他動詞文の目的語と対応する。また、クラス２に所属する他動詞は、対として自動詞の形式をもたない。

４．２．１．クラス２動詞－派生動詞

このクラスには他の動詞からの派生動詞や他の動詞語幹、あるいは、その一部を重複させてつくられた派生動詞は、基本的に所属しない。ただし、重複によってつくられたと見られる動詞が、ただ１例のみクラス２に所属する。重複によってつくられたとみられる派生動詞 **kwOrOrO** **'to winnow'**である。しかし、この動詞語幹と対をなす中動相の形式は、**kwOr-ErE 'to be winnowed'**であり、この中動相の形式は、**kwOrOrO** の直接の中動相形式ではなく、派生動詞 **kwOrOrO** のもとになったと考えられる動詞 **kwOrO** と対をなす中動相の形式と考えられる。しかし、この派生のもとになったと考えられる動詞 **kwOrO** そのものは、クマム語の語彙には存在しない。また、**kwOrOrO** 自体、クマム語の重複による派生動詞のつくりかたからすると不規則な形式である。なぜなら、クマム語は重複による派生動詞をつくるとき、動詞語幹の最初の音節を重複する。ところが **kwOrOrO** は、語幹の２番目の音節を重複している。

(20a) A-kwOrOrO kAl (Transitive)
1sg-IMP-winnow millet
'I winnow millet.'

(20b) kAl O-kwOr-ErE (Middle)
'Millet has been winnowed.'

４．２．２．クラス２動詞の意味的特徴

クラス２に所属する動詞の意味特徴は、以下のとうりである。

（１） 刺激物 Stimulus をともなう知覚行為 perception や認識行為 cognition : look at, find, notice, see, hear, read

ただし、これらの動詞が表現する出来事や活動には、複数の関与者が存在し、それら関与者が高度に切り離し可能 highly distinguishable である。

情報的な発話行為 informative speech acts : ask a question, talk with, say words, speak a language

刺激物 Stimulus をともなう内的経験 inner experiences : trust, obey, divine, measure, count,thank, compare, choose, taste, follow rules

ただし、これらの動詞が表現する出来事や活動には、複数の関与者が存在し、それら関与者が高度に切り離し可能である。

(21a) A-UdO AtIn (Transitive)

1sg-IMP-find child

'I find a child.'

(21b) AtIn O-Ud-ErE (Middle)

child 3sg-PERF-find-Mid

'The child has been found.'

（2） 過程や出来事を引き起こす動的な活動 dynamic activities : spread, fold, cover, uncover, lock, tear, close, polish, fill, cut, split, squeeze, pinch, hold in, catch, embrace, grasp, hit

(22a) A-yAbO awii (Transitive)

1sg-IMP-open kraal

'I open a kraal.'

(22b) awii O-yAb-ErE (Middle)

kraal 3sg-PERF-open-Mid

'The kraal has been opened.'

（3） モノやヒトに働きかけその姿勢や位置、あるいは、状態を変化させる動的な活動 : carry, bring, send, drive, hide, take, scrape, turn over, beat off, wipe, pluck out, paddle, throw, cook, pound grain, cultivate, fence, thatch, weave, mill, farm, forge, sew

自らが行為者である動的な活動 : enter, pass, avoid, pass by, climb, step on, make one's way through, surround, track, start, begin, be able to do

ただし、これらの動詞が表現する活動には、目標 Goal や道程 Path が内包されている。

いわゆる「身繕い」 'Grooming'動作 : comb, massage, phlebotomize, pick one's nose, brush one's teeth, wash one's sexual organ, blow

ただし、これらの動詞が表現する活動には、高度に切り離し可能な複数の関与者が存在する。

(23a) A-gwEtO maembe (Transitive)

1sg-IMP-shake down with a hook mango

'I shake down a mango with a hook.'

(23b) maembe O-gwEt-ErE (Middle)

mango 3sg-PERF-shake down with a hook-Mid

'The mango has been shaken down with a hook.'

(24a) A-dOnyO kano (Transitive)

1sg-IMP-enter that place

'I enter into that place.'

(24b) kano dOny-ErE (Middle)

that place 3sg-IMP-enter-Mid

'That place can be entered.'

(25a) a-kuro wiy-a (Transitive)

1sg-IMP-comb head-my

'I comb my head.'

(25b) wiy-a o-kur-ere (Middle)

head-my 3sg-PERF-comb-Mid

'My head has been combed.'

（4） 本来的に使役 causative の意味をもった行為：feed, plant, bewitch, encourage, teach, hurry somebody, govern, attack, save, defend someone, hatch, leave behind someone

(26a) A-sUpO AtIn (Transitive)

1sg-IMP-encourage child

'I encourage a child.'

(26b) AtIn sUp-ErE (Middle)

child 3sg-IMP-encourage-Mid

'The child can be encouraged.'

クラス２動詞が表現する行為や出来事には少なくとも２個の関与者が内包されている。たとえ

ば、クラス２動詞が表現する発話行為は、伝えられる情報を含んでいるか、あるいは、情報を受け取る聞き手の存在を内包している（情報的な発話行為)。ヒトが言葉を発して「言う」とき、ヒトは、言葉を介して、「誰か」に「何か」を伝える。この過程が成立するには、伝えられるべきなんらかの情報が、また、情報を受け取るべき何者かが存在することが前提となる。

おなじように、クラス２動詞が表現する知覚行為や認識行為は、２個の関与者の存在が前提となる（刺激物をともなう知覚行為や認識行為)。２個の関与者にうち一方は、経験者 Experiencer で、他方は、経験者の内部で心的過程を引き起こす刺激物 Stimulus である。たとえば、（２１a）の文では、１人称・単数が経験者であり、AtIn「子供」が刺激物である。

クラス２動詞が表現する動的な活動は、行為や出来事を引き起こす原因者 Causer、あるいは、行為者 Agent と、その行為や出来事がふりかかる被原因者 Causee、あるいは、被動作者 Patient の存在を内包する（過程や出来事を引き起こす動的な活動)。たとえば、（２２a）の文は、家畜囲いが何者かによって開かれるという出来事を表現している。そのとき、家畜囲いは、被原因者、あるいは、被動作者である。１人称・単数は、被原因者、あるいは、被動作者である「家畜囲い」に、状態の変化、すなわち、「閉じている状態から開いた状態」への変化をあたえる原因者、あるいは、行為者である。

クラス２動詞が表現する自らが行為者である動的な活動は、行為が向かう目標 Goal、あるいは、行為がたどる道程 Path を内包している（自らが行為者である動的な活動)。（２４a）の文は、自らが自らに働きかけて「入る」行為をおこなわせる。「入る」行為は、その行為の目標、あるいは、道程である「場所」の存在を必要とする。

クラス２動詞のなかには、いわゆる「身繕い」動詞とよばれる動詞が所属する。クラス２に所属する「身繕い」動詞が表現する活動は、２個の関与者を内包している。それらの関与者の１つは、行為をおこなう者 Actor であり、もう１つは、行為を被る身体部分である。（２５a）の文で「身繕い」動詞「梳る」は、２個の関与者をとる。１人称・単数が行為をおこなう者であり、「頭」が行為を被る身体部分である。ここで重要なのは、「頭」は、身体の小さな一部であって、身体全体ではなく、行為をおこなう者から切り離しが可能な distinguishable ものと心理的にみなされることである。このように２個の関与者は、高度に切り離しが可能である。

クラス２動詞で表現される本来的に使役の意味をもった活動は、活動をおこなわせる者と活動をおこなう者の存在を内包している（本来的に使役の意味をもった行為)。（２６a）の文は、「勇気づける」者と「勇気をもつ」という行為をおこなう者の存在を内包する。

このように、各クラスに所属する動詞の意味特徴を一般化することは、大層困難であるが、一

般化を試みることは重要であろう。たとえば、クラス２動詞が表現する出来事や活動の意味的特徴の一般化を試みよう。

クラス２動詞はかならず２個以上の関与者をもち、それらの関与者は物理的に、または、心理的に高度に切り離しが可能であることが、クラス２動詞によって表現される活動、または、出来事の特徴である。たとえそれらの関与者が、話し手と情報そのものであろうとも、話し手と聞き手であろうとも、あるいは、経験者と刺激物であろうとも、また、行為者と被動作者であろうとも、また、原因者と被原因者であろうとも、あるいは、行為をおこなう者とその身体部分であろうとも、関与者のあいだで高度な切り離し可能性が存在する。

４．３．クラス３動詞（４５）

クラス３動詞は、対として中動相の形式をもつ若干の数の他動詞からなる。クラス３に所属する他動詞は、対として自動詞をもたない。クラス３動詞でつくられる中動相文の主語は、対となる他動詞文の主語と対応する。クラス３に所属する動詞の中動相形式意味は、ときどき、中動相語幹が由来するもとの他動詞語幹がもつ本来の意味から、ずれることがある。たとえば、（３０a）の文における他動詞 nywAkO は、本来の意味として「食べ物を分配する」を意味するが、その対となる中動相語幹は、人間の「統一、協調をはかる」を意味する（３０ｂ）。

４．３．１．クラス３動詞－派生動詞

クラス３動詞には、ただ１例も他の動詞語幹からつくられる派生動詞や、他の動詞語幹、あるいは、動詞語幹の一部を重複してつくられる派生動詞は存在しない。

４．３．２．クラス３動詞の意味特徴

クラス３に所属する動詞が表現する動作、活動は、ほぼ均一な意味特徴をもっている。クラス３に所属する動詞は、それらがもつ意味特徴から主に２つのグループにわけることができる。１つのグループは、表現する動作が心理的に切り離し可能性が低い２個の関与者を内包する動詞からなる。もう１つのグループは、固有の意味として再帰的な、あるいは、相互的な意味をもつ動詞からなる。

（１）　刺激物Stimulusをともなう内的な経験inner experiences：like, dislike, be surprised at, feel homesick, fear

ただし、関与者は、心理的に低い切り離し可能性 low distinguishability をもっている。

刺激物をともなう感情的な知覚行為、あるいは、認識行為：think about with worries, spy

本来的な意味として相互的な意味をもつ知覚行為、認識行為、ならびに、発話行為：get reconcile with, understand, know, look for, greet, order, consult, request, promise

行為がむかう実在をともなう感情的な発話行為：abuse, lay a curse upon, scorn

(27a) a-moto wello (Transitive)
1sg-IMP-greet visitor
'I greet a visitor.'

(27b) o-mot-ere (Middle)
1pl-PERF-greet-Mid
'We greet each other.'

(28a) A-mArO AtIn (Transitive)
1sg-PERF-like child
'I like a child.'

(28b) O-mAr-ErE (Middle)
1pl-PERF-like-Mid
'We like each other.'

（2） 受動者 Patient をともなう身体機能 bodily functions：urinate, spit, vomit milk, have diarrhea
ただし、関与者は、心理的、文化的理由から低い切り離し可能性をもっている。
身体全体にむかう身体動作：scratch, straighten, tighten up

(29a) A-ryEO yAt (Transitive)
1sg-IMP-straighten tree
'I straighten a tree.'

(29b) A-ryE-ErE 5)
1sg-PERF-straighten-Mid
'I have straightened myself.'

（3） 固有の意味として再帰的な、あるいは、相互的な意味をもつ動的な活動：knock, knock over, clap hands, follow, wait, hit on, take care of, assist, reserve, get married with

(30a) A-nywAkO cAm (Transitive)

1sg-IMP-share food

'I share food.'

(30b) O-nywAk-ErE (Middle)

1pl.-PERF-share-Mid

'We have united.'

（２７a）の文における動詞 moto 'to greet'は、固有の意味として相互的な意味をもつ、発話行為を表現する動詞の１つである（本来的に相互的な意味をもつ知覚、認識行為)。この動詞は、話しかける者 addresser と話しかけられる者 addressee の両者を必要とする。そしてこの動詞が表現する行為は、本来的に相互的でもある。なぜなら「挨拶」する行為は、相互的でなければ成立しない。

文（２８a）の動詞 mArO 'to like'は、知覚行為、あるいは、認識行為を表現する動詞の１つである（刺激物をともなう内的経験)。この動詞が表現する活動は、２個の関与者を内包している。２個の関与者の１つは、経験者 Experiencer であり、他方の関与者は、刺激物 Stimulus である。（２８a）の文では１人称・単数が経験者であり、刺激物は、AtIn 'child'である。これらの関与者は、たがいに心理的に親密に結びついている。刺激物と経験者が密接に結びついているので、経験者が異なると刺激物が経験者にあたえる経験は異なったものになってしまう。この点がクラス２に所属する知覚、あるいは、認識動詞とまったく違う点である。すなわち、クラス２に所属する知覚、認識動詞の場合、刺激物と経験者は結びついていない。したがって経験者が異なるものに変わっても、経験者が経験する活動には変化がない。

たとえば、「見る」という動詞はクラス２の知覚動詞である。ある「ヒト」（経験者）に「子供」（刺激物）が「見える」なら、他の「ヒト」（経験者）にも「子供」（刺激物）が同様に「見える」。しかし、クラス３に所属する知覚動詞である「好く」の場合、ある「ヒト」（経験者）が「子供」（刺激物）が「好き」だとしても、別の「ヒト」（経験者）は、その「子供」（刺激物）が「好き」ではないかもしれない。このように経験者が異なると、刺激物が経験者にあたえる経験は異なったものになる。

クラス３に所属する身体の動作を表現する動詞は、身体全体に及ぶ活動を表現する（身体全体にむかう身体動作)。活動する身体は、行為をおこなう者 Actor から完全に分離されることは不可能である。（２９ｂ）の文で「まっすぐに伸びる」のは、行為をおこなう者の身体全体である。

身体全体は、行為をおこなう者から切り離すことはできない。クラス３に所属する動詞が表現する身体の動作は、２個の関与者を内包するが、これらの関与者は心理的に低い切り離し可能性をもっている。この点がクラス２の動詞が表現する身体動作と異なる点である。クラス２に所属する動詞が表現する身体動作は、２個の関与者を内包し、それらの関与者は心理的に高い切り離し可能性をもっている。

４．４．クラス４動詞（２１）

クラス４は、わずかな数の中動相の形式を対にもつ他動詞からなる。クラス４動詞は、対として自動詞形をもたない。そして、クラス４動詞でつくられる中動相文の主語は、ときには対をなす他動詞文の目的語と対応し、また、ときには対をなす他動詞文の主語と対応する。すなわち、クラス４動詞は、中動相文タイプ１と中動相タイプ２の両方をつくることができる。クラス４動詞でつくられる中動相タイプ１の文は、ほぼ語用論的に受動文と等価であり、クラス４動詞でつくられる中動相タイプ２の文は、本来的に再帰的な、あるいは、相互的な意味をもった行為や出来事を表現する。たとえば、（３１ｂ）の文は、（３１a）の文と対をなす中動相タイプ１の文であり、（３１ｃ）の文は、（３１a）の文と対をなす中動相タイプ２の文である。

４．４．１．クラス４動詞－派生動詞

クラス４には他の動詞語幹からつくられる派生動詞や他の動詞語幹、あるいは、他の動詞語幹の一部を重複してつくる派生動詞は存在しない。

４．４．２．クラス４動詞の意味的特徴

クラス４に所属する動詞は、２重の意味的特徴をもっている。クラス４動詞が表現する活動や出来事は、複数の関与者を内包している。しかし、これらの関与者は、ときには高い切り離し可能性をもつことも、また、ときには低い切り離し可能性をもつことがある。さもなければ、これらの関与者は、中動相の文において互いに相互的な関係で結ばれている。また、クラス４動詞でつくられる中動相の形式は、それのもとになった他動詞の本来の意味からはずれた意味をもつことがある。以下のクマム語動詞にあたえた英語訳において、括弧内は中動相語幹になったときの意味である。

（１）刺激物をともなう知覚行為や認識行為：**hear (Mid. agree with)**

ただし、複数の関与者は、ときには心理的に高い切り離し可能性をもつが、ときには低い切り離し可能性をもつ。

行為がむかう実在をともなう発話行為：**call (Mid. invite)**

ただし、複数の関与者は、ときには心理的に高い切り離し可能性をもつが、ときには低い切り離し可能性をもつ。

(31a) a-winyo wer (Transitive)
1sg-IMP-hear music
'I hear music.'

(31b) wer winy-ere (Middle 1)
music 3sg-IMP-hear-Mid
'Music can be heard.'

(31c) a-winy-ere ked-e (Middle 2)
1sg-IMP-hear-Mid with-him
'I can understand him (I agree with him).'

（２）身体動作、あるいは、「身繕い」動作:stretch something (Mid. stretch one's body), scratch something (Mid. scratch one's body), wash something (Mid. wash oneself), wear someone (Mid, dress oneself), fasten something (Mid. tie oneself)
ただし、複数の関与者は、ときには心理的に高い切り離し可能性をもち、ときには低い切り離し可能性をもつ。

(32a) A-lwOkO wAng'-A (Transitive)
1sg-IMP-wash face-my
'I wash my face.'

(32b) wAng'-A O-lwOk-ErE (Middle 1)
face-my 3sg-PERF-wash-Mid
'My face has been washed.'

(32c) A-lwOk-ErE (Middle 2)
1sg-PERF-wash-Mid
'I have washed myself (whole body).'

（３）中動相タイプ２の文において本来的に再帰的な、あるいは、相互的な意味をもつ動的な

活動：drop something (Mid. lost one's business), connect (Mid. queue), chase (Mid. chase each other), swing something (Mid. stroll), shoot (Mid. kick each other), divide (Mid. part with)

(34a) a-uco maembe (Transitive)
1sg-IMP-drop mango
'I drop a mango.'

(34b) maembe uc-ere (Middle 1)
mango 3sg-IMP-drop-Mid.
'The mango can be dropped.'

(34c) a-uc-ere (Middle 2)
1sg-PERF-drop-Mid.
'I dropped myself (I lost my business).'

（4）モノ、あるいは、者に働きかけて、その状態の変化をもたらす動的行為：choke (Mid. suicide),kill (Mid. suicide), part (Mid. leave each other), change (Mid. turn one's back),try (Mid. imitate), suck out (Mid. kiss)
ただし、中動相タイプ２の文においては、これらの動詞が表現する行為は、本来的に再帰的な、あるいは、相互的な意味をもっている。

(35a) a-poro egoe (Transitive)
1sg-IMP-try on clothes
'I try on clothes.'

(35b) egoe o-poore / o-por-ere 6) ked-a (Middle 1)
clothes 3sg-PERF-try on-Mid. to-me
'The clothes fit to me.'

(35c) Stella por-ere kede Sylvia (Middle 2)
Stella 3sg-IMP-try on-Mid. to Sylvia
'Stella pretends to be Sylvia.'

（３１ｃ）の文においては、刺激物である３人称・単数は、経験者である１人称・単数と心理的に親密な関係をもっている。経験者が異なるものになると、刺激物が引き起こす活動、あるいは、出来事はまったくちがった結果になる。「わたし」（経験者）は、「彼」（刺激物）を理解し、同意するけれど、別のヒト（経験者）は、「かれ」と同意しないかもしれない。このように（３１ｃ）の文では、複数の関与者が心理的に低い切り離し可能性で結ばれている。しかし、同じ動詞をつかった中動相文（３１ｂ）の場合、複数の関与者は心理的に高い切り離し可能性をもつ。（３１ｂ）ではたとえ経験者が異なるものになろうとも、刺激物によって引き起こされた活動、出来事は同じ結果になる。「わたし」（経験者）に聞こえる「音楽」（刺激物）は、だれにでも聞こえるものだ。したがって刺激物「音楽」は、「わたし」（経験者）からまったく独立して存在するといえる。

（３２a）と（３２ｂ）と（３２ｃ）の文は、関与者の切り離し可能性を議論するのに良い例である。（３２ｂ）の文は、（３２a）と対をなす中動相タイプ１の文であり、（３２ｃ）の文は、（３２a）と対をなす中動相タイプ２の文である。また、動詞 lwOkO ‘to wash’は、いわゆる「身繕い」動詞の１つである。（３２ｂ）の文の場合、wAng'-A「わたしの顔」は、行為をおこなう者 actor とは切り離された身体部分の一部である。すでにクラス２動詞についての議論でわかったように、もし、複数の関与者が高い切り離し可能性をもっているなら、他動詞文の目的語が、対となる中動相文の主語になることから、高い切り離し可能をもつ関与者である wAng'-A「わたしの顔」は、中動相タイプ１の主語になることができる。一方、（３２ｃ）の文では、２個の関与者、「わたし」と「洗われる身体」が内包されている。そして、「洗われる」のは身体全体であって、身体の一部ではない。したがって身体全体は、「わたし」（行為をおこなう者 actor）とは切り離し可能性が低い。クラス３動詞についての議論でわかったように、複数の関与者が低い切り離し可能性で結びついているなら、他動詞文の主語が、対となる中動相文の主語になることから、中動相タイプ２の主語になるのは他動詞文の主語である「わたし」ということになる。中動相タイプ２の文では、２個の関与者である「わたし」と「洗われる身体」は、再帰的な関係で結ばれる。

（３４ｃ）の文は、文字どおりに解釈すると「わたしはわたしの身体を落とす」であるが、しかし、この文の実際の意味は、「事業に失敗する」である。（３４ｃ）の文においては、実際には分節的には表現されてはいないけれど、２個の関与者が存在することが内包されており、しかも、それらの関与者は、再帰的な関係で結ばれている。そして関与者は、分節的にはただ１つが中動相タイプ２の文の主語として表現される。

４．４．３．クラス１，２，３，４動詞の意味的特徴－関与者の切り離し可能性、発話行為・知覚行為・認識行為と感情性、情報性、活動・移動動詞と使役性

それではここでクラス１とクラス２とクラス３とクラス４に所属する動詞の意味的特徴をまとめておこう。これらクラスの動詞の意味的特徴を形式化することは極めて困難ではあるが、いくつかの典型的な意味特徴をみつけることができる。まず第１に関与者の切り離し可能性について考察しよう（表６）。

表６ 関与者の切り離し可能性 I

動詞クラス	関与者の切り離し可能性
クラス１	－
クラス２	高い
クラス３	低い
クラス４	高い / 低い

クラス１動詞が表現する行為や出来事は、たった１個の関与者を内包するだけであるから、関与者の切り離し可能性については問題とならない。関与者の切り離し可能性が問題となるのは、動詞が表現する動作や出来事に関与する複数の関与者が存在する場合のみである。逆に、クラス１動詞が表現する出来事や行為の特徴は、関与者が１個のみであることといっても良い。

クラス２動詞が表現する出来事や行為は、２個の関与者を内包している。しかも、それらの関与者は、心理的に高度に互いに切り離される。家畜囲いを開く「わたし」と「家畜囲い」は、高度に切り離された２個の関与者である（２２a）（２２ｂ）。高度な切り離し可能性をもつ関与者は、中動相文においては、一方の関与者が他方の関与者から切り離されて、１つのスロットを埋める。なぜなら、中動相文は、項が埋めるスロットを１つしかもっていないからである。ふつう、そのスロットを埋めるのは中動相と対をつくる他動詞文における目的語のスロットを埋めていた項である。他動詞文の主語のスロットを埋めていた関与者は、中動相文では分節的には表現されない。ただし、それは、分節的には表現されないが、存在することは前提となる。したがって、クラス２動詞をつかった中動相文は、語用論的に受動文と等価な文の役割をはたす。

クラス３動詞が表現する出来事や行為は、２個の関与者を内包しているが、それらの関与者が、心理的に高度に互いに切り離すことが不可能である。関与者の切り離し可能性が低い。子供を

好きと思っている「わたし」と「子供」は、心理的に高度に結びついていて、互いに切り離すことができない（２８a）（２８ｂ）。低い切り離し可能性をもつ２個の関与者は、中動相文では１つのスロットを埋めることになる。その結果、クラス３動詞でつくられる中動相文は、再帰的な、あるいは、相互的な意味をもつことになる。

クラス４に所属する動詞は、２重の意味的特徴をもつ。１つは、クラス２動詞がもつ意味的特徴とおなじものであり、他の１つは、クラス３動詞がもつ意味的特徴とおなじものである。クラス４動詞が表現する行為や出来事は、２個の関与者を内包している。しかし、それら関与者は、あるときには心理的に高度に切り離し可能であるが、あるときには低い切り離し可能性をもっている。２個の関与者が心理的に高度に切り離し可能な場合、クラス４動詞がつくる中動相文は、クラス２動詞がつくる中動相文と同様に、対となる他動詞文の目的語を主語にとる。洗われる「顔」と洗う「わたし」は、心理的に切り離しが可能である（３２a）（３２ｂ）。この場合、クラス４動詞がつくる中動相文は、クラス２動詞がつくる中動相文と同様に、語用論的に受動文と等価な文になる。

２個の関与者が心理的に低い切り離し可能性をもっている場合、クラス４動詞がつくる中動相文は、クラス３動詞がつくる中動相文と同様に、対となる他動詞文の主語を主語にとる。洗われる「身体」全体は、洗う「わたし」から心理的に切り離されることはできない（３２ｃ）。切り離し可能性が低い２個の関与者は、中動相文の１つのスロットを共有して埋めることになる。したがって、このような場合、クラス４動詞がつくる中動相文は、クラス３動詞がつくる中動相文と同様に、再帰的な、あるいは、相互的な意味をもつ。

これらの事実からわかることは、動詞の意味的な解釈は、動詞が本来もっている意味だけで決定することができず、動詞が本来もっている意味と関与者がもっている意味的特徴の両者によって決定されるということである。

つぎに発話行為や知覚行為、認識行為において観察される感情性 emotive-ness と情報性 informative-ness という意味特徴について考察する（表７）。

表７　発話行為・知覚行為・認識行為動詞と感情性、情報性 I

動詞クラス	感情性 / 情報性
クラス１	感情性
クラス２	情報性
クラス３	感情性（行為がふりかかる実在をともなう）
クラス４	情報性 / 感情性

クラス１動詞が表現する発話行為、知覚行為、認識行為は、感情性という意味的特徴をもつ。クラス１動詞が表現する発話行為、知覚行為、認識行為は、行為をおこなう者 actor ただ１人の内部において成し遂げられる。それらの行為には、伝えられるべき情報が含まれてはいないし、また、情報を受け取る聞き手や聴衆を必要としない。悲しいという感情は、「わたし」（行為をおこなう者）の内部で完結している。なんら伝えられるべき情報も含んでいないし、情報をうけとる聞き手が存在する必要もない（１４）。クラス１動詞が表現する行為は、感情性という意味的特徴をもつといえる。

クラス２動詞が表現する発話行為、知覚行為、認識行為には、伝えられるべき情報が含まれている。あるいは、それらは、情報を受け取る聞き手、聴衆を必要とする。話すという行為は、伝えられる情報が含まれるし、聞き手の存在を必要とする。したがって、これらの行為は、高度な情報性という意味的特徴をもつといえる。

クラス３動詞が表現する発話行為、知覚行為、認識行為には、伝えられるべき情報が含まれている。あるいは、情報を受け取る聞き手、聴衆の存在を必要とする。しかし、情報、あるいは、聞き手は、心理的に行為をおこなう者と結びついている。これらの行為は、感情性という意味的特徴をもっている。あざけるという行為は、あざけらられる「相手」（行為がふりかかる実在）を必要とするが、その行為が運ぶ情報は、行為をおこなう者と心理的に結びついている。これらの行為は、感情性という意味的特徴をもっているといえる。

クラス４動詞が表現する発話行為、知覚行為、認識行為は、ときには感情性という意味的特徴をもち、ときには情報性という意味的特徴をもつ。「わたし」が聞いている歌は、情報を伝える（３１a）（３１ｂ）。一方、同意する「わたし」と、同意される「人間」と感情的なつながりが存在する（３１ｃ）。クラス４動詞が表現する行為は、ときには感情性、ときには情報性の２重の意味的特徴をもつといえる。

もし、われわれが関与者の切り離し可能性という概念を拡張することを試みるなら、感情性、

あるいは、情報性という概念は、関与者の切り離し可能性という概念で説明が可能かもしれない。感情性は、関与者の低い切り離し可能性と、情報性は、関与者の高度な切り離し可能性で説明できるかもしれない。

つぎに活動 Action や移動 Motion を表現する動詞における動詞のクラスと使役性 Causativity との関係を考察しよう（表８）。

表８ 活動・移動動詞と使役性 I

動詞クラス	使役性
クラス１	（自らが行為者である）
クラス２	高い
クラス３	再帰的、相互的
クラス４	高い / 再帰的、相互的

クラス１動詞が表現する行為、出来事は、行為をおこなう者 actor ただ１人によって完遂される。行為をおこなう者が、みずからに働きかけて活動、あるいは、出来事を成し遂げさせる。「跪く」「わたし」は、「わたし」みずからに働きかけて、「跪いた」状態へと「わたし」を移動させる（１６）。したがって、クラス１動詞が表現する活動、出来事は、自らが行為者であること self-agentive-ness が特徴的な意味である。

クラス２動詞が表現する活動、移動は、なに者かがだれかに、あるいは、なにかに働きかけて、その状態や位置、あるいは、姿勢を変化させることを意味する。棹を使ってゆすり落とす「わたし」は、「マンゴー」に働きかけて、「マンゴー」の位置を変化させる（２３a）。また、クラス２動詞には、本来的に使役の意味をもつ動詞が含まれている。勇気づける「わたし」は、「子供」に働きかけて、「勇気のある」状態へ変化させる（２６a）。このようにクラス２動詞によって表現される活動、移動は、高い使役性という意味特徴をもっている。

クラス３動詞が表現する活動、移動は、行為をおこなう者自身にむかう。食べ物を分配する「我々」は、「我々」自身に働きかけて、食べ物がさしだすことを成し遂げさせる。したがって、クラス３動詞が表現する活動、移動は、再帰的な、あるいは、相互的な意味を特徴としている。

クラス４動詞が表現する活動、移動は、ときには高い使役性を特徴とするが、ときには、再帰的、あるいは、相互的な意味を特徴とする。洗う「わたし」は、「顔」に働きかけて、洗われた状態へと変化させる（３２a）（３２ｂ）。しかし別の文脈では、洗う「わたし」は、「わたし」

自身に働きかけて、洗われた状態へと変化させる（３２ｃ）。このように、クラス４動詞が表現する活動、移動は、２重の意味的特徴をもっている。

使役性は、関与者の切り離し可能性と関係がある。複数の関与者が切り離し可能性がない、あるいは、低ければ、必然的にそれらの関与者のあいだは相互的な、あるいは、再帰的な関係をもつことになる。したがって、関与者が低い切り離し可能性をもつ場合、動詞が表現する出来事や活動は、自らに向かう再帰的、あるいは、相互的な意味をともなう行為となる。

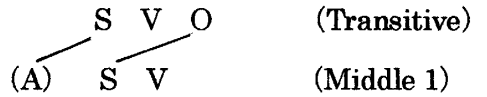
最後に、表６，７，８は、一見、関与者の意味的特徴を表すかのように思われるが、しかし、そうではない。たとえば、表６がしめす関与者の切り離し可能性は、関与者がどんなものであるか、関与者のあいだにどのような関係があるのかで決定されるが、しかし、動詞が表現する行為や出来事の意味的特徴と完全に独立して決定されるのではない。たとえば、「わたし」と「子供」が関与者のとき、動詞が「なぐる」であれば、これらの関与者「わたし」と「子供」は、高度な切り離し可能性をもっているが、動詞が「好きに思う」であれば、これらの関与者「わたし」と「子供」は、低い切り離し可能性をもっている。このように 2 個の関与者が同じであっても、動詞が異なると、関与者間の関係は異なるものになる。同様に表７の感情性・情報性にしても、さらに、表８の使役性にしても、それらは、動詞の意味的特徴によって決定される。

４．４．４．中動相文と文法関係

つぎに簡単に文法関係の付与について考察する。

表９ 中動相と文法関係

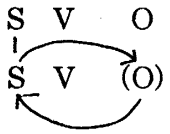
クラス２、４動詞



(Transitive)

(Middle 1)

クラス３、４動詞



(Transitive)

(Middle 2)

２個の関与者が存在するとき、他動詞文では当然、一方が主語のスロットを、他方が目的語のスロットを埋める。中動相文は、ただ１個、主語のスロットのみをもつ。そこでクラス２とクラス４（中動相タイプ１をつくるとき）動詞の場合、２個の関与者は、高度な切り離し可能性

をもつので、対となる他動詞文の目的語のスロットを埋めていた関与者が中動相文の主語のスロットを埋めると、他方の関与者は、分節的には表現されない行為者として文の核の外に存在することになる。表９では、分節的に表現されない行為者は、括弧のなかのＡで示す。

クラス３とクラス４（中動相タイプ２をつくるとき）動詞の場合、２個の関与者は、低い切り離し可能性をもつので、対となる他動詞文の主語のスロットを埋めていた関与者が中動相文の主語のスロットを埋めると、他方の関与者は、分節的には表現されない、主語と再帰的な、あるいは、相互的な関係をもつ目的語として文の核の外に存在することになる。表９では、分節的に表現されない目的語は、括弧のなかの O で示す。再帰、あるいは、相互的な関係は、矢印のサークルで示す。このように中動相タイプ１と中動相タイプ２では、動詞を中心とする項の文法関係は、まったく異なるパターンになる。このように、中動相形という形態論的には同じかたちをしている形式がとる項の文法関係は、動詞の意味と、関与者の意味と、そして、関与者間の関係から決定される。

第１章で述べたように、クマム語の文は、先頭の位置に焦点のスロットをもっている。特別に焦点のスロットを埋める名詞句が存在しないとき、主語のスロットと焦点のスロットは、重なる位置にある。他動詞文の場合、２つの関与者のうち、行為者が焦点、あるいは、主語のスロットを埋める。中動相タイプ１文の場合、主語のスロット、あるいは、焦点のスロットを埋めるのは受動作者、あるいは、被原因者である。分節的に表現されない行為者は、当然、焦点のスロットを埋めることはない。つまり、中動相文は、行為者に焦点がない文ともいえる。これは、分節的に表現されない行為者が不特定なものである事実とうまく適合する。中動相タイプ２文の場合、主語のスロット、あるいは、焦点のスロットを埋めるのは、行為者である。行為者は、分節的に表現されない受動作者、あるいは、被原因者と再帰的、あるいは、相互的関係をもつ。

４．５．クラス５動詞（６８）

さほど多くないが、若干の他動詞は、対として自動詞形をもち、中動相形をもたない。これらの他動詞の多くは、他の動詞語幹からつくられた派生動詞か、他の動詞語幹、あるいは、他の動詞語幹の一部を重複させてつくられた派生動詞である。重複によりつくられた派生動詞は、出来事や行為の繰り返し **repetition**、あるいは、出来事や行為が進行中の過程 **process** であることを意味する。

中動相によって表現される行為や活動は、行為や活動の状態 **state** と密接な関係があることはすでに議論した。また、対として中動相形をもつクラス２、クラス３、クラス４動詞は、基本

的に重複による派生動詞や他の動詞からの派生動詞をもたないことも注目すべき現象である。逆に、クラス５、クラス６、クラス７には、重複によりつくられた派生動詞が多く所属する。そして、クラス５、クラス６、クラス７に所属する他動詞が対として中動相形ではなく、自動詞形をもつ。これらの事実から、出来事や行為の繰り返し、あるいは、出来事や行為の過程 process を固有の意味にもつ動詞は、中動相形をもたない、または、中動相文をつくることはできないと言える。

クラス５動詞でつくられる自動詞文の主語は、対としてもつ他動詞文の目的語と対応する。他動詞文（３６a）において kAtA 'potatoes'は、目的語のスロットを埋めているが、（３６a）と対をなす自動詞文（３６ｂ）では、主語のスロットを埋めている。他動詞文の目的語が対となる自動詞文の主語に対応する場合、この自動詞文を自動詞文タイプ１と呼ぶ。クラス５動詞は、自動詞文タイプ１をつくる。

４．５．１．クラス５動詞－派生動詞（４３）

クラス５に所属する６８の動詞のうち、他の動詞語幹からの派生動詞と、他の動詞語幹、あるいは、他の動詞語幹の一部を重複させてつくられた派生動詞は、４３個存在する。クラス５は、ほぼ３分の２が派生動詞からなると言える。

（３６a）と（３６ｂ）の文において、動詞 ng'IngIdO 'to smash' と ng'ing'idun 'to be smashed' は、他の動詞語幹の一部を重複してつくられた派生動詞であり、同じ動作（イモを押しつぶす）が繰り返されることを意味している。上で議論したように、中動相は、出来事や活動の状態、あるいは、実現可能性と密接に関係しており、出来事や活動の繰り返しや過程を意味する動詞は、中動相形をもたない。出来事や活動の繰り返しを表現する動詞 ng'Ing'IdO 'to smash'が中動相形をもたない事実とよく一致する。

(36a) A-ng'Ing'IdO kAtA (Transitive)
1sg-IMP-smash potatoes
'I smash potatoes.'

(36b) kAtA ng'ing'idun (Intransitive)
potaoes 3sg-IMP-smash:Intr.
'Potatoes are smashed.'

さらに、クラス５、クラス６、クラス７動詞によって表現される行為や出来事は、自動詞文に

おいては共通して、自動性、あるいは、自発性 spontaneous の意味をもつ。（４１a)、（４１ｂ)、（４１ｃ）の文は、これらのクラスに所属する動詞によってつくられる自動詞が表現する行為や出来事に自動性、あるいは、自発性の意味が含まれることを説明するための良い例である。（４１ｃ）の文は、他動詞文（４１a）と対をなす自動詞文である。クマム語の話し手は、（４１ｃ）の文を適格な文として許容しない。なぜなら、肉は、「自動的に」、あるいは、「自発的に」切られた状態になることはありえない。必ず肉を切る行為者である「誰か」が存在しなければならない。放置したままでは、肉は切られた状態にはならない。一方、（４１ｂ）は、（４１ｃ）とおなじ自動詞を用いて、主語を違う名詞にかえた文である。クマム語の話し手は、（４１ｂ）の文を意味的に適格な文であると許容する。なぜなら、手は、行為者の意図することなく、事故により「自動的に、あるいは、自発的に」切ってしまうことはありえるからである。（４１ｂ）の文は、クラス５、クラス６、クラス７に所属する動詞の自動詞形が表現する行為や出来事の特徴である自動詞性、あるいは、自発性に違反することはないので、クマム語の話し手は、この文を適格な文として許容するのである。出来事や行為の繰り返し、あるいは、過程と、出来事や行為の自動性、あるいは、自発性、これら２つの特徴は、クラス５、クラス６、クラス７動詞をクラス２、クラス３、クラス４動詞から区別する、クラス５、クラス６、クラス７動詞が共通してもつ意味的特徴である。

クラス５、クラス６、クラス７動詞によって表現される出来事や活動のそれぞれを区分する意味的特徴は、先に議論した３つの意味的特徴、すなわち、関与者の切り離し可能性、感情性・情報性、使役制によって説明できる。これら３つの特徴についてはすでに議論したので以下では詳しい議論を繰り返さない。

４．５．２．クラス５動詞の意味的特徴

クラス５動詞が表現する出来事、活動の意味的特徴は、多様であり、均質な意味的特徴でまとめることはできない。クラス５動詞が表現する出来事、活動の意味的特徴は以下のとうりである。

１）なに者かの感情を引き起こす実在をともなう内的経験 inner experiences : satisfy, surprise, delight

知覚動詞 perceptual、ただし、他動詞文では行為者の意図的な行動 voluntary action を表現し、自動詞文では自発的な出来事 spontaneous events を表現する : smell

37a) cAm o-yeng'-a (Transitive)

food 3sg-PERF-satisfy-1sg

'The food has satisfied me.'

(37b) a-yeng' kede cAm (Intransitive)

1sg-IMP-satisfy with food

'I am satisfied with food.'

(38a) a-ng'weo ring'o (Transitive)

1sg-IMP-smell meat

'I smell meat.'

(38b) ring'o ng'e rAc (Intransitive)

meat 3sg-IMP-smell bad

'The meat smells bad.'

2）動的な活動や動作 dynamic actions を表現する動詞、ただし、他動詞文では行為者の意図的な行動 voluntary actions を表現し、自動詞文では自発的な出来事や過程 spontaneous processes を表現する：drip, pour out, hang-be suspended, fillip off, flow, carry on surface, put near, strip off, stumble, wear inside out

なにか、あるいは、なに者かに働きかけてその姿勢 posture の変化を引き起こす動的な活動、ただし、他動詞文では行為者の意図的な行動を表現し、自動詞文では自発的な出来事を表現する：bend, twist, twist the neck of a bird, avoid sunbeam

(39a) pi mOlO yAt (Transitive)

water 3sg-IMP-carry tree

'Water carries a tree on surface.'

(39b) yAt mOl (Intransitive)

tree 3sg-IMP-carry

'The tree is carried (on water).'

3）なにか、あるいは、なに者かに働きかけてその状態 state の変化を引き起こす活動、ただし、自動詞文で原因者 Causer は内包されない：fill, soak, intoxicate, rot, burn, give

pregnancy, cure, suckle, cut off bushes and clear the ground, split, melt, block, tighten, treat, obstruct the sight

(40a) a-pong'o dOg-A (Transitive)
1sg-IMP-fill mouth-my
'I fill my mouth.'

(40b) dOg-A o-pong' (Intransitive)
mouth-my 3sg-PERF-fill
'My mouth is full.'

3）クラス２動詞が表現する行為や出来事の繰り返し、ただし、自動詞文で原因者 Causer は内包されない：cut into pieces, crush into pieces, run over, tear into pieces, snap, loosen, disturb, disorder, shake repeatedly, smash, scatter, put in
ただし、クラス２に所属する動詞語幹の一部を重複してつくられた派生動詞である。

(41a) A-ng'Ong'OlO ring'o (Transitive)
1sg-IMP-cut into pieces meat
'I cut meat into pieces.'

(41b) cIng'-A o-ng'ong'olun (Intransitive)
hand-my 3sg-PERF-cut into pieces: Intr.
'My hand has been cut into pieces.'

(41c) ?? ring'o o-ng'ong'olun (Intransitive)
meat 3sg-PERF-cut into pieces: Intr.
'Meat has been cut into pieces.'

クラス５動詞は、外的実在によって引き起こされる内的経験を表現する。外的実在は、他動詞文の主語のスロットを埋める。（３７a）の文において外的実在である「食べ物」は、「わたし」に「満足する」という内的経験を引き起こす。

クラス５に所属する知覚動詞は、他動詞文において、行為をおこなう者による行為をおこなう意図を要求する。他動詞文（３８a）では、「肉」を「におう」のは、「わたし」の意図的な行為

である。しかし自動詞文では行為や出来事は、自発的であり、だれの意図も存在しない。たとえば、（３８ｂ）の文において「肉」は自発的に悪い「においがする」のであり、「肉」に働きかける、悪い「におい」を引き起こすなに者かの意図、あるいは、「肉」を嗅ぐなに者かの意図は前提とならない。

動詞 mOlO '(water) carry something on surface'は、対として自動詞形をもっている（３９ｂ）。自動詞文（３９ｂ）では「木」が水の上を流れていくのはだれの意図でもない、自発的な、あるいは、自動的な出来事である。同様に、自動詞文（４０ｂ）において「わたしの口」が食べ物で「満ちている」のはだれの意図、意志によるものではない。しかし、他動詞文（４０a）では「わたし」がわたし自身の意図、意志で「わたしの口」に働きかけて「満ちた」状態へと変化を引き起こす。

４．６．クラス６動詞（7）

クラス６に所属する動詞の数は、大層少ない。クラス６に所属する動詞は、対として自動詞形をもっているが、中動相形をもたない。クラス６動詞がつくる自動詞文の主語は、対となる他動詞文の主語と対応する。自動詞文の主語が対となる他動詞文の主語と対応する場合、このような自動詞文を自動詞文タイプ２と呼ぶ。クラス６動詞は、自動詞文タイプ２をつくる。

４．６．１．クラス６動詞－派生動詞

クラス６に所属する７個の動詞のうち、３個は、他の動詞語幹からつくられた派生動詞か、他の動詞語幹、あるいは、他の動詞語幹の一部を重複させてつくられた派生動詞である。重複によりつくられた派制動詞は、動作や出来事の繰り返し、あるいは、過程を表現する。そして、これらの派生動詞は、出来事や行為の状態、あるいは、実現可能性と意味的に密接な関係のある中動相をつくることはできない。

４．６．２．クラス６動詞の意味的特徴

クラス６動詞が表現する出来事や活動の意味的特徴は、以下のとうりである。

1）固有の意味として再帰的な意味や相互的な意味をもつ動的な行為、ただし、自動詞文においてその行為は、繰り返しの意味を含む：**argue, leak, shake-shiver, have sexual intercourse with, give a birth, look around, caress**

(42a) **a-pyem** **kop** **ked-e** **(Transitive)**
1sg-IMP-argue **affair** **with-3sg**
'I argue with him.'

(42b) o-pyem (Intransitive)

1-pl-IMP-argue

'We argue.'

(43a) A-nywAlO bangi (Transitive)

1sg-PERF-give a birth twins

'I bore twins.'

(43b) A-nywAl (Intransitive)

1sg-PERF-give a birth

'I gave a birth.'

2）クラス３動詞が表現する行為の繰り返し：look around, caress

ただし、クラス３に所属する動詞語幹の一部を重複してつくられた派生動詞である。

(44a) a-mumulo nyAkO (Transitive)

1sg-IMP-caress girl

'I caress a girl.'

(44b) o-mumulun (Intransitive)

1pl-IMP-caress

'We are caressing each other.'

クラス６に所属する動詞は、固有の意味として再帰的な意味、あるいは、相互的な意味をともなった活動や出来事を表現する。また、クラス６動詞は、本来的に繰り返しや進行中の動作や出来事を表現する。たとえば、（４２ｂ）の文において「議論する」ことは、本来的に、関与者によって相互におこなわれるのであり、一方的な行為とは考えられない。また、「議論する」ことは、一度限りの行為ではなく、繰り返され、応酬される。

動詞 mumulo 'to caress'は、本来的に相互的な行為を表現する（４４ｂ）。なぜなら、「愛撫する」行為は、誰か「愛撫される」者の存在がなくては成立しない。

４．７．クラス７動詞（１）

クラス７にはただ１個の動詞のみが所属する。しかも、その動詞は、他の動詞語幹の一部を重複することによってつくられる派生動詞である。クラス７動詞は、対として中動相形をもたず、

対として自動詞形をもつ。ただし、クラス７動詞でつくられる自動詞文の主語は、あるときは、対となる他動詞文の目的語に対応し、また、あるときは、対となる他動詞文の主語と対応する。つまり、クラス７動詞は、自動詞文タイプ１（４５ｂ）と自動詞文タイプ２（４５ｃ）の両方をつくることができる。

４．７．１．クラス７動詞－派生動詞

クラス７に所属する動詞は、ただ１個のみが記録されている。しかも、それは、他の動詞語幹の一部を重複してつくられた派生動詞である。

４．７．２．クラス７動詞の意味的特徴

１）動的な活動の繰り返し、ただし、関与者は、ときには高度な切り離し可能性をもち、ときには低い切り離し可能性をもつ：**shake**

(45a) a-yayang'o wi-a (Transitive)
1sg-IMP-shake head-my
'I shake my head.'

(45b) wi-a o-yayang'un (Intransitive 1)
head-my 3sg-PERF-shake: Intr.
'My head is shaken.'

(45c) a-yayang'un (Intransitive 2)
1sg-IMP-shake: Intr.
'I shake myself (shiver).'

自動詞文タイプ１である文（４５ｂ）において「頭」は、行為をおこなう者から心理的に切り離し可能である。しかし、自動詞文タイプ２である文（４５ｃ）において、震えるのは、身体全体であり、「身体全体」は、行為者である「わたし」から心理的に切り離すことはできない。さらに自動詞文タイプ１と自動詞文タイプ２の両方において、「頭」と「身体全体」は、自発的に震えるのであり、行為者の意図により震えるのではない。ここには「頭」や「身体全体」に働きかけて震えさせる行為者の意図や意志は、存在しない。このように動詞 **yayang'o 'to shake'** は、あるときには、高度な切り離し可能性をもった複数の関与者をとり、あるときには、心理的に切り離し可能性が低い関与者をとることができる。したがって、このクラス７動詞は、自動詞文タイプ１と自動詞文タイプ２の両方をつくることができる。さらに、この動詞は、重複

によってつくられた派生動詞であり、出来事や活動の繰り返しを表現する。したがって、この動詞は、中動相をつくることができない。また、この動詞が表現する出来事や活動は、自動詞文では自発的に、あるいは、自動的に成し遂げられる。

４．７．３．クラス５，６，７動詞の意味的特徴－関与者の切り離し可能性、発話行為・知覚行為・認識行為と感情性、情報性、活動・移動動詞と使役性

クラス５、クラス６、クラス７に所属する動詞の数は、多くないので、意味的特徴を抽出するのに十分ではないけれど、とりあえずクラス５、クラス６、クラス７動詞が表現する行為や出来事の意味的特徴を、クラス２、クラス３、クラス４動詞の意味特徴を説明した３つの原理を援用して説明する。クラス２、クラス３、クラス４動詞の意味特徴を説明した３つの原理は、関与者の切り離し可能性と、行為の感情性・情報性と、行為の使役性であった。クラス５、クラス６、クラス７動詞の意味特徴を説明するのにもこれら３つの原理がほぼ適用できる。

表１０ 関与者の切り離し可能性 II

動詞クラス	切り離し可能性
クラス５	高い
クラス６	低い
クラス７	高い/低い

表１１ 発話行為・知覚行為・認識行為と感情性、情報性 II

動詞クラス	感情性、情報性
クラス５	情報性
クラス６	感情性 ？
クラス７	情報性/感情性 ？

表１２ 活動・移動動詞と使役性 II

動詞クラス	使役性
クラス５	高い
クラス６	再帰的、相互的
クラス７	高い/再帰的、相互的

（４５a）と（４５ｂ）と（４５ｃ）の例が関与者の切り離し可能性を説明するのに良い例である。クラス７動詞である **yayang'o 'to shake'**は、あるときは高い関与者の切り離し可能性を示し、あるときは低い関与者の切り離し可能性を示す２重の性格をもっている。この動詞は、関与者が高い切り離し可能性を示すとき、自動詞タイプ１文（４５ｂ）をつくり、関与者が低い切り離し可能性を示すとき、自動詞タイプ２文（４５ｃ）をつくる。震わせる「わたし」と「わたし」によって震わせられる「頭」は、切り離しが可能な関与者である（４５ｂ)。いっぽう、震わせる「わたし」から「わたし」によって震わせられる「身体全体」は、心理的に切り離しが可能ではない（４５ｃ)。

（４５ｂ）の文において行為をおこなう者「わたし」は、「頭」に働きかけて、「頭」を震わせる。このように（４５ｂ）の文において、行為者は、受動作者に働きかける。つまり、動詞が表現する行為は、使役性をもつ。このときクラス７動詞は、自動詞文タイプ１をつくる。ところが、（４５ｃ）の文において行為をおこなう者「わたし」は、「わたし自身」に働きかけて、身体全体を震わせる。このように（４５ｃ）の文において、行為者は、行為者自らに働きかける。つまり、動詞が表現する行為は、再帰的な意味をともなっている。このときクラス７動詞は、自動詞文タイプ２をつくる。

クラス５に所属する動詞が表現する内的経験には、行為をおこなう者に内的経験を引き起こす外的実在が必要とされる。なにが内的経験を生じさせたのかを知らしめる情報がここには含まれている。クラス５動詞が表現する出来事や行為には情報性という意味特徴が観察できるが、クラス６とクラス７が表現する出来事や行為についての感情性、あるいは、情報性については、所属する動詞の数が少ないため明らかではない。

４．７．４．クラス５，６，７動詞の意味的特徴－動作の繰り返し、出来事・行為の自発性

つぎにクラス５動詞、クラス６動詞、クラス７動詞をクラス２動詞、クラス３動詞、クラス４動詞から区別する、クラス５，６，７動詞に共通する意味的特徴について考察する。クラス５，６，７動詞は、中動相をつくることができない。クラス５，６，７に所属する他動詞は、対として自動詞形をもち、自動詞文をつくることはすでに述べた。クラス５，６，７動詞がつくる自動詞文が表現する出来事や活動の意味的特徴は、自発性、あるいは、自動性である。たとえば、（３８ｂ）の文において「肉」はひとりでに「におってくる」のであり、だれかの意図や意志によってこの出来事が生ずるのではない。ただし、（３８ｂ）と対をなす他動詞文においては、においをかぐ「わたし」は、意図的に、あるいは、意志してその行為をおこなう（３８a)。

一方、中動相をつくるクラス２動詞の場合、たとえば、（２０ｂ）において「トウジンビエ」

はだれか行為をおこなう者の意図や意志にもとづいて「ふるいにかけられる」のである。「トウジンビエ」を「ふるいにかける」なに者かが存在しなければならない。（２０ｂ）において行為者は、分節的には表現されていないが、（２０ｂ）の文が意味的に適格な文となるためには、行為者の存在が前提となる。このようにクラス２，３，４動詞とクラス５，６，７動詞を区別する重要な意味的特徴は、クラス２，３，４動詞がつくる中動相においては行為をおこなう者の意図や意志が内包されるが、クラス５，６，７動詞がつくる自動詞文においてはこれらの動詞が表現する出来事や活動は、自発的で自動的であり、だれの意図も意志も内包されないことである。

表１３ 自発性 I（中動相文や自動詞文における）

動詞クラス	自発性
クラス２，３，４	無
クラス５，６，７	有

もう１つのクラス５，６，７動詞が表現する出来事や活動の意味的特徴は、出来事や活動の繰り返しである。動詞語幹の一部を重複してつくる派生動詞は、もっぱらクラス５，６，７に観察されることは注目に値する。出来事や活動の繰り返しを意味する重複による派生動詞と、本来的な意味として出来事や活動の繰り返しを意味する動詞をも含めて、出来事や活動の繰り返しを表現する動詞は、基本的にクラス５，６，７に所属する。たとえば、（４２a）において動詞 **pyem 'to argue'**は、重複による派生動詞ではないが、本来的な意味として活動の繰り返しのを意味している。なぜなら「論じる」行為は、一度きり話しかけるのではなく、なんども繰り返し話しかけ、説得する行為である。

表１４ 出来事や行為の繰り返し II

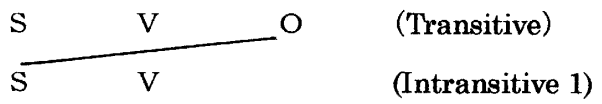
動詞クラス	繰り返し
クラス２，３，４	無
クラス５，６，７	有

４．７．４．自動詞文と文法関係

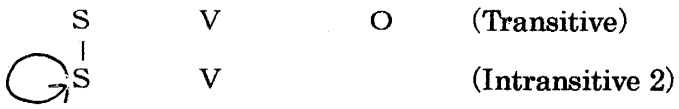
つぎにクラス５，６，７動詞を用いた自動詞文における文法関係について簡単に議論する。

表１５ 自動詞文と文法関係

クラス５，７



クラス６，７



前節で議論したようにクラス５，６，７に所属する動詞によりつくられる自動詞文において動詞が表現する行為や活動は、その意味的特徴に自発性、あるいは、自動性を含んでいる。つまり、行為をおこなう者の、あるいは、原因者の意図や意志が存在しないことが、クラス５，６，７動詞によりつくられた自動詞文が適格な文であることの前提となっている。この事実は、クラス２，３，４動詞でつくられる中動相文において行為者が分節的には表現されないけれど、存在することが、クラス２，３，４動詞を用いてつくられた中動相文が適格な文であることの前提となることとまったく相反している。行為をおこなう者、あるいは、原因者の意図や意志が存在しないという事実から、クラス５，６，７動詞でつくられる自動詞文には行為者が存在しないと考えられる。また、文の先頭の位置は、焦点のスロットである。とりわけ焦点のスロットを埋める名詞句が存在しないとき、焦点のスロットと主語のスロットは、重なる。他動詞文で２個の関与者が存在するとき、そして、なんら特別な強調などが存在しないなら、普通、行為者が主語、あるいは、焦点のスロットを埋め、受動作者、あるいは、被原因者が目的語のスロットを埋める。つぎに、クラス５，７動詞によりつくられた自動詞文（自動詞文タイプ１）の場合、行為者に焦点がなく、受動作者、あるいは、被原因者に焦点がある。したがって、受動作者、あるいは、被原因者が主語、あるいは、焦点のスロットを埋めることになる。そして、自動詞文は１個のスロットしかもたないが、スロットを埋める関与者もただ１個の受動作者、あるいは、被原因者のみである。

一方、クラス６，７動詞によりつくられる自動詞文（自動詞文タイプ２）では、対となる他動詞文における２個の関与者が切り離せないか、あるいは、再帰的、あるいは、相互的な関係をもっている。自動詞文タイプ２においては、中動相タイプ２がもっている分節的に表現されな

いが存在が前提となる目的語のスロットが存在しない。したがって、２個の関与者が１つのスロットである主語、あるいは、焦点のスロットを同時に埋めていると考えられる。この２個の関与者が１つのスロットを埋めていることを、表１４において矢印のサークルで示す。

４．８．クラス８動詞（２２）

クラス２，３，４に所属する他動詞は、中動相形を対としてもち、自動詞形をもたず、クラス５，６，７に所属する他動詞は、自動詞形を対としてもち、中動相形をもたない。しかし、数は多くないけれど、若干の他動詞は、対として中動相形と自動詞形の両方をもっている。対として中動相形と自動詞形の両方をもつ他動詞は、中動相タイプ１と自動詞タイプ１をもつグループと、中動相タイプ２と自動詞タイプ２をもつグループと、中動相タイプ１、自動詞タイプ１と中動相タイプ２、自動詞タイプ２の両方をもつグループの３つに分かれる。第１のグループは、クラス８動詞と、第２のクループは、クラス９動詞と、第３のグループは、クラス１０動詞と呼ぶ。基本的には中動相タイプ１をもつ他動詞は、自動詞タイプ１をもち、自動詞タイプ２をもつことはない（クラス８動詞)。また、中動相タイプ２をもつ他動詞は、自動詞タイプ２をもち、自動詞タイプ１をもつことはない（クラス９動詞)。つまり、タイプ１とタイプ２の両方の文をもつクラス１０に所属する動詞をのぞいて、動詞は、中動相文でも自動詞文でもタイプ１文をつくる。また、動詞は、中動相文でも自動詞文でもタイプ２文をつくる。動詞は、中動相文でタイプ１を、自動詞文でタイプ２をつくるというようなタイプが交差することは基本的にない。ただし、この傾向に従わないわずかな例外的な動詞が存在する。

クラス８に所属する他動詞は、対として中動相形と自動詞形の両方をもつ。そして、１個の例外的な動詞が存在するが、クラス８動詞がつくる中動相文と自動詞文は、タイプ１文である。つまり、対をなす他動詞文の目的語が、中動相文や自動詞文の主語に対応する。ただ１つの例外的動詞は、中動相文の主語が対をなす他動詞文の目的語と対応し（中動相タイプ１)、自動詞文の主語が対をなす他動詞文の主語と対応する（自動詞文タイプ２)。クラス８に所属する動詞の数は、２２である。

(46a)	A-bElO	yAt	(Transitive)
	1sg-IMP-split	tree	
	'I split a tree.'		

(46b) yAt bEl-ErE (Middle)

tree 3sg-IMP-split-Mid

'The tree can be split.'

(46c) agulu O-bEElE (Intransitive)

pot 3sg-PERF-split

'The pot has been cracked.'

(46d) *yAt O-bEElE (Intransitive)

tree 3sg-PERF-split

'The tree has been split.'

クラス８動詞を用いてつくられた自動詞文は、自発的な、あるいは、自動的な出来事や活動を表現する。（４６ｃ）の文において「壷」は、だれか行為をおこなう者の意図や意志により割られるのではなく、自発的に、あるいは、自動的に「ひび割れる」のである。そこにはだれの意図も意志も存在しない。一方、「木」は、だれかが意図的に、あるいは、意志でもって「裂く」のである。なぜなら、「木」は、自然に、自発的に「裂ける」ことはありえない。したがって、自発性、あるいは、自動性が内包されるクラス８動詞によりつくられる自動詞文（４６ｄ）は、「木」が自発的に「裂く」ことがないゆえに、意味的に不適格な文となる。しかし、クラス８動詞でつくられる中動相文は、分節的には表現されないが、行為者の存在が前提となっているので、「木」を主語にして中動相文をつくることは可能である。じっさい「木」を主語にしてクラス８動詞をもちいた中動相文（４８ｂ）は、行為者の意図や意志が内包されるので、意味的に適格な文である。

４．８．１．クラス８動詞－派生動詞

中動相形を対にもつクラス２，３，４動詞が他の動詞語幹からの派生動詞や他の語幹や語幹の一部を重複させてつくられた派生動詞をもたなかったように、中動相形を対にもつクラス８動詞は、派生動詞をもたない。

４．８．２．クラス８動詞の意味的特徴

クラス８動詞が表現する出来事や活動の意味的特徴は、以下のとうりである。

１）刺激物をともなう知覚行為、ただし、複数の関与者は高度な切り離し可能性をもつ。また、自動詞文において動詞が表現する出来事や行為は、自発性をもつ：see

(47a) A-nEnO AtIn (Transitive)

1sg-IMP-see child

'I see a child.'

(47b) AtIn O-nEn-ErE (Middle)

child 3sg-PERF-see-Mid

'The child has been found.'

(47c) AtIn neeno (Intransitive)

child 3sg-IMP-see

'The child is visible.'

2）なにか、あるいは、なに者かに働きかけてその状態の変化を引き起こす動的な活動、ただし、自動詞文において動詞が表現する出来事や行為は自発的である：light, blow, wake up, crack, spread, cover, accomplish, break, coil, pierce, tear, stretch, add, hang, make roll, make something cool

(48a) A-cArO tOc (Transitive)

1sg-IMP-light torch

'I light a torch.'

(48b) tOc cAr-ErE (Middle)

torch 3sg-IMP-light-Mid

'The torch can be lighted.'

(48c) tOc cAArO (Intransitive)

torch 3sg-IMP-light

'The torch shines.'

クラス８に所属する動詞が表現する出来事や活動は、２個の関与者を内包している。そして、これらの関与者は、高度に切り離し可能なものである。しかし、中動相文、あるいは、自動詞文において、自発性に関しては２重の意味特徴をもっている。クラス８動詞は、中動相文、あるいは、自動詞文において、あるときは行為をおこなう者の存在を前提とするが、あるときは行為をおこなう者の存在を前提としない。たとえば、中動相文（４８ｂ）において「懐中電灯」

に明かりをつける行為者は、分節的には表現されてはいないが、存在することが、中動相文が適格な文であるための前提である。しかし、自動詞文（４８ｃ）において「懐中電灯」は、だれの意志や意図がなくとも輝いていることは可能である。同じように、中動相文（４７ｂ）において子供を見ている行為者は、分節的に表現されていないが、存在することは、この文が適格な文となるための前提である。一方、自動詞文（４７ｃ）においてクマム語の話し手は、子供を見ているだれかが存在するか、存在しないかについて関心がない。

４．８．３．クラス８動詞－例外的な動詞

クラス８に所属する動詞のなかにただ１個、中動相文タイプ１と自動詞文タイプ２をつくる動詞が存在する。

(49a) A-sUtO mO (Transitive)
1sg-IMP-smear oil
'I smear oil.'

(49b) mO sUt-ErE (Middle 1)
oil 3sg-IMP-smear-Mid
'The oil can be smeared.'

(49c) A-sUt kede mO (Intransitive 2)
1sg-PERF-smear with oil
'I smear with oil (My body is oily).'

ただ１つの例外的な動詞 sUtO 'to smear'は、中動相文（４９ｂ）と自動詞文（４９ｃ）の両方をつくることができる。中動相文（４９ｂ）の主語「油」は、対をなす他動詞文（４９a）の目的語「油」と対応する（中動相タイプ１）。自動詞文（４９ｃ）の主語「わたし」は、対をなす他動詞文（４９a）の主語「わたし」と対応する（自動詞タイプ２）。この動詞は、「身繕い」動詞の１つであり、しかも、この動詞がとる複数の関与者は、あるときには高度な切り離し可能性をもち、あるときには低い切り離し可能性をもつ。中動相文（４９ｂ）においては、関与者は「わたし」と「油」であり、これらの関与者は高度な切り離し可能性をもっている。一方、自動詞文（４９ｃ）のもとになる他動詞文が本来もっている関与者は、「わたし」と「わたしの身体全体」である。これらの関与者は低い切り離し可能性で結ばれている。高度な切り離し可能性をもつ関与者に発話者が焦点をあてたとき、クマム語の話し手は、中動相タイプ１を選ぶ。

低い切り離し可能性をもつ関与者に発話者が焦点をあてたとき、クマム語の話し手は、中動相タイプ２を選択すると、本論ですでに主張した。ところが、この例外的な動詞にかぎり、低い切り離し可能性をもつ関与者をもつ場合、中動相タイプ２ではなく、自動詞タイプ２をクマム語の話し手は、選択する。これは、おそらくこの例外的な動詞が自動詞タイプ２文で表現する出来事が、「身体自体」が自発的に輝いていること、すなわち、活動の自発性に聞き手の注意を向けることを、話し手は意図していると考えられる。

この例外的な動詞が表現する出来事や活動の意味的特徴は、以下のとうりである。

１）「身繕い」動詞、ただし、複数の関与者は、あるときは、高度な切り離し可能性をもち、あるときは、低い切り離し可能性をもつ。また、この動詞をつかってつくられた自動詞文において表現される出来事や活動は、自発的である：**smear**

４．９．クラス９動詞（３）

ただ３個の他動詞がクラス３に所属する。クラス９に所属する他動詞は、対として中動相形と自動詞形の両方をもつ。クラス９動詞を用いてつくられる中動相文と自動詞文の主語は、対をなす他動詞文の主語と対応する。つまり、クラス９動詞は、かならず、中動相タイプ２と自動詞文タイプ２をつくる。クラス９にはクラス８動詞で観察された例外的な動詞は存在しない。

クラス９に所属する動詞によって表現される出来事や活動は、それらがもつ意味的な特徴の１つとして、本来的な再帰的、あるいは、相互的な意味をもつ。複数存在する関与者が再帰的、あるいは、相互的な関係で結ばれているから、タイプ９動詞を用いてつくられる他動詞文や中動相文や自動詞文において、行為をおこなう者の意図や意志が文に内包される傾向がある。この傾向は、自動詞文での自発性、あるいは、自動性と相反する。本来的に再帰的な、あるいは、相互的な意味をもつ動詞は、中動相文をつくる傾向があり、自動詞文をつくらない傾向があるのは、自動詞文の自発性と相反するからである。中動相文と自動詞文の両方をもつクラス９動詞の数がきわめてすくないのはこの理由からである。

４．９．１．クラス９動詞－派生動詞

クラス９には、他の動詞語幹からの派生動詞や他の語幹の一部を重複してつくられた派生動詞は存在しない。これは、中動相形をもつ動詞が重複による派生動詞をもたない事実と一致する。

４．９．２．クラス９動詞の意味的特徴

クラス９に所属する動詞が表現する出来事や活動の意味的特徴は以下のとうりである。

１）行為が向かう実在をともなう感情的発話行為：**tell the correct things**

(50a) a-tuco kop (Transitive)

1sg-IMP-tell the correct things affair

'I tell the correct things.'

(50b) o-tuc-ere (Middle)

1pl-IMP-tell the correct things-Mid

'We tell the truth about ourselves.'

(50c) a-tuco (Intransitive)

1sg-IMP-tell the correct things

'I tell the truth.'

2）行為が向かう実在をともなう自らに受益的な self-benefactive 活動：defecate, shelter from

(51a) A-pyElO remo (Transitive)

1sg-IMP-defecate blood

'I defecate blood.'

(51b) A-pyEl-ErE (Middle)

1sg-IMP-defecate-Mid

'I can defecate (by myself).'

(51c) A-pyElO (Intransitive)

1sg-IMP-defecate

'I defecate.'

クラス９に所属する動詞が表現する出来事や活動の意味的特徴は、実在をともなう感情的発話行為と自らを受益者とする活動である。たとえば、中動相文（５１ｂ）は、行為者が自らの意図、あるいは、意志でもって排泄という行為を遂行できることを意味する。一方、自動詞文（５１ｃ）は、排泄をする行為者の意志や能力に聞き手の注意を向けない。（５１ｃ）において排泄行為は、たんに自然な物理的現象にすぎない。

４．１０．クラス１０動詞（1）

クラス１０にはただ１個の他動詞が所属する。クラス１０動詞は、中動相タイプ１と中動相タイプ２、さらに、自動詞タイプ１をつくることができる。定義的には、自動詞タイプ２をも

つくることができるはずだが、実際には自動詞タイプ２をつくることはできない。すなわち、クラス１０動詞を用いてつくられた中動相文の主語は、あるときには対をなす他動詞文の目的語と対応し（中動相タイプ１）、あるときには対をなす他動詞文の主語と対応する（中動相タイプ２）。また、クラス１０動詞を用いてつくられた自動詞文の主語は、対をなす他動詞文の目的語と対応する（自動詞文タイプ１）。

４．１０．１．クラス１０動詞－派生動詞

クラス１０動詞は、他の動詞語幹からつくられる派生動詞ではない。また、他の動詞語幹の一部を重複してつくる派生動詞でもない。

４．１０．２．クラス１０動詞の意味的特徴

クラス１０動詞が表現する出来事や活動の意味的特徴は、以下のとうりである。

１）なにか、あるいは、なに者かに働きかけて、その状態の変化を引き起こす動的な活動、ただし、関与者はときには高度な切り離し可能性をもち、ときには低い切り離し可能性をもつ。また、自動詞文において表現された活動は、自発的である：cut

(52a) A-ng'OlO cIng'-A (Transitive)
1sg-IMP-cut hand-my
'I cut my hand.'

(52b) ring'o ng'Ol-ErE (Middle 1)
meat 3sg-IMP-cut-Mid
'The meat can be cut.'

(52c) A-ng'Ol-ErE (Middle 2)
1sg-IMP-cut-Mid
'I cut myself.'

(52d) cIng'-A O-ng'Ol (Intransitive 1)
hand-my 3sg-PERF-cut
'My hand is cut (accidentally).'

クラス１０動詞が表現する行為や出来事は、２個の関与者をもつ。これら関与者は、ときには高度な切り離し可能性をもち、ときには低い切り離し可能性をもつ。たとえば、中動相タイプ１の文では、分節的には表現されないが、存在することが前提となっている行為者「肉を切る

人」と「肉」が関与者として存在する。「肉を切る人」と「肉」は、高度に切り離しが可能な２個の関与者である。一方、中動相タイプ２の文において関与者は、「わたし」と「わたしの身体全体」であり、これらの関与者は心理的に低い切り離し可能性をもつ。また、「わたしの手」は、事故で切ることはありえることである。つまり、行為者の意図や意志と関係なく「手」を切ることはありえる。したがって、自動詞文タイプ１の（５２ｄ）は、自発的な、あるいは、自動的な活動である。自動詞文が自発性、あるいは、自動性を内包していることはすでに議論した。ゆえに自発的な出来事を表現する（５２ｄ）は、意味的に適格な文である。しかし、中動相タイプ２の文（５２ｃ）と対をなす自動詞文、つまり、主語を「わたし」にかえて文を発話すると、クマム語の話し手は、その文を不適格な文と判断する。なぜなら、「わたし自信の身体全体」を切る（自殺行為を意味する）ことは、行為をおこなう者「わたし」の意図や意志なしには不可能であるからである。このことは、行為をおこなう者の意図や意志のない、自発的、自動的な活動のみが自動詞文で表現されることに違反する。同様に、主語を「肉」にかえて自動詞文をつくることもできない。その理由は、「肉」もだれか行為をおこなう者の意図や意志なしに切られることはありえないからである。だれか行為をおこなう者の意図や意志の存在が前提となる文は、中動相文であって、自動詞文ではない。「肉」を主語にした文は、自動詞文タイプ１となるが、自動詞文の出来事や活動の自発性と違反する。したがって、「肉」を主語にすると、肉が切られるという出来事は、中動相文でしか表現できない。

４．１０．３．クラス８，９，１０動詞の意味的特徴－関与者の切り離し可能性、出来事・活動の自発性

クラス８，９，１０に所属する動詞の数は、意味的特徴について一般化をおこなうに十分ではない。しかし、クラス２，３，４動詞やクラス５，６，７動詞の意味的特徴について一般化をこころみた際に用いた議論を援用して、クラス８，９，１０動詞の意味的特徴の一般化をこころみる。

クラス８動詞とクラス９動詞とクラス１０動詞を分ける意味特徴は、関与者の切り離し可能性である。クラス８動詞が表現する出来事や活動に関与する関与者は、高い切り離し可能性をもっている。クラス９動詞が表現する出来事や活動は、関与者の低い切り離し可能性が特徴である。クラス１０動詞が表現する出来事や活動には、あるときには高い切り離し可能性をもつ関与者が関与し、あるときには低い切り離し可能性をもつ関与者が関与する。クラス１０動詞は、関与者の切り離し可能性については２重の意味的特徴をもっている。

表１６ 関与者の切り離し可能性 III

動詞クラス	切り離し可能性
クラス８	高い
クラス９	低い
クラス１０	高い/低い

クラス８とクラス１０には発話行為、知覚行為、認識行為を表現する動詞が所属しないので、それらの行為における情報性、あるいは、感情性については不明である。クラス９に所属する動詞が表現する発話行為、知覚行為、認識行為には感情性という意味的特徴がある。

表１７ 発話行為・知覚行為・認識行為と情報性、感情性 III

動詞クラス	情報性、感情性
クラス８	？
クラス９	感情性
クラス１０	？

行為、出来事に含まれる使役性に関して、クラス８に所属する動詞が表現する行為や出来事は、受動作者や被原因者に働きかける使役性が高いことが特徴である。一方、クラス９動詞が表現する行為や出来事は、行為者に再帰的な、あるいは、相互的な意味をともなう。クラス１０動詞が表現する行為や出来事は、あるときには受動作者に働きかける使役性が高く、あるときには行為者自らに行為が及ぶ、すわわち、再帰的、あるいは、相互的な意味をともなう。

表１８ 活動・移動動詞と使役性 III

動詞クラス	使役性
クラス８	高い
クラス９	再帰的、相互的
クラス１０	高い/再帰的、相互的

クラス８，９，１０動詞をクラス２，３，４動詞とクラス５，６，７動詞から区別する意味的特徴は、自動詞文、あるいは、中動相文における行為や出来事の自発性、あるいは、自動性と

出来事や行為の繰り返しである。

表１９ 自発性 II

動詞クラス	自発性
クラス２，３，４	無
クラス５，６，７	有
クラス８，９，１０	無（中動相文）/有（自動詞文）

表２０ 出来事や行為の繰り返し II

動詞クラス	繰り返し
クラス２，３，４	無
クラス５，６，７	有
クラス８，９，１０	無

複数の関与者のうち行為者に焦点がない文をつくるとき、クラス８，９，１０動詞が表現する出来事や行為が自発性をともなうなら、クラス８，９，１０動詞を用いてつくられる文は、自動詞文である。複数の関与者のうち行為者に焦点がない文をつくるとき、クラス８，９，１０動詞が表現する出来事や行為に自発性をともなわないなら、８，９，１０動詞を用いて作られる文は、中動相文である。

クラス８，９，１０動詞を用いてつくられる中動相文や自動詞文は、出来事や行為の繰り返しを表現することはない。クラス８，９，１０には重複によりつくられた派生動詞は存在しないことに注目すべきである。

クラス８，９，１０動詞を用いてつくられる中動相文や自動詞文における項のあいだに存在する文法関係については、すでにおこなった議論をそのまま援用できる。中動相文における文法関係の付与については、４．４．４ですでに議論した。自動詞文における文法関係の付与については、４．７．４で議論した。

４．１１．クラス１１動詞（５）

クラス１１に所属する動詞は、形態論的に中動相の形式をとっている語幹のみが記録されていて、それらが対をなしていたであろう他動詞形が存在しない。クラス１１に所属する動詞は、ただ５個のみが記録されている。そのうち１個の動詞 tuure ‘to become ill’が例外的に自動詞形

をもっている5)。実際には存在しないが、対となる他動詞文が存在するとして、通常、中動相文の主語は、対となる他動詞文の主語と対応するであろうと考えられる。つまり、クラス１１動詞は、中動相タイプ２をつくっていると考える。

４．１１．１．クラス１１動詞－派生動詞

本論文では、中動相の形式をこの論文で言う派生動詞として扱わなかった。本論文で派生動詞は、他の動詞語幹から派生してなんらかの意味的な違いをもった独立した動詞語幹、たとえば、語幹の１部を重複することでつくる、動作の繰り返しなどの新たな意味をともなう動詞語幹と定義する。この定義からクラス１１には所属する派生動詞は、存在しない。

４．１１．２．クラス１１動詞の意味的特徴

クラス１１動詞が表現する出来事や活動の意味的特徴は、以下のとうりである。

1）本来的な意味として再帰的、あるいは、相互的な意味をともなう出来事や活動：go together

2）本来的な意味として再帰的、あるいは、相互的な意味をともなう内的（精神的、物理的）経験：envy, boast, become ill

(53) A-dIng'-ErE ked-e (Middle)
1sg-IMP-envy-Mid with-him
'I envy him.'

(54a) a-tuure (Middle)
1sg-IMP-become ill
'I become ill (because of someone).'

(54b) a-tuo (Intransitive)
1sg-IMP-be sick
'I am sick.'

クラス１１に所属する動詞が表現する出来事や活動の意味的特徴は、その活動や出来事が本来的に再帰的、あるいは、相互的であることにある。この意味的な特徴からもクラス１１に所属する動詞がつくる中動相文は、中動相文タイプ２であると考えられる。クラス１１動詞が表現する出来事や活動は、行為者の意図や意志により遂行されると考えられる。ただ１例の例外的な動詞 tuure 'to become ill'のみが自動詞文において自発的、あるいは、自動的な出来事や活動

を表現する。ただし、この例外的な動詞がつくる中動相文は、実はだれか行為者の呪詛によって「病気になる」ことを意味しているのである。つまり中動相文においては行為者の意図、あるいは、意志が内包されている。一方、この動詞を用いてつくる自動詞文は、行為者の意図や意志が存在しない自発的な、あるいは、自動的な意味をもつ。なぜなら、クマム文化において「病気になる」のは、人間の呪詛によるのであるが、行為者の意図や意志に聞き手の注意を向けない文が、この動詞を用いた自動詞文といえる。この例外的な動詞は、クラス１１動詞が表現する出来事や活動の意味的特徴を説明するのに適切な例となっている。

クラス１１に所属する動詞が表現する意味的特徴から、また、クラス１１動詞が中動相文をつくり、自動詞文をつくらないという事実と、さらに、クラス１１動詞によってつくられる中動相文が中動相タイプ２文であるという事実から、クラス１１をクラス３の下位クラスと考えて良い。クラス１１動詞とクラス動詞の意味的特徴をまとめる（表２１）。

表２１　クラス３とクラス１１の意味特徴

動詞クラス	関与者の切り離し可能性	発話行為・知覚行為・認識行為と情報性、感情性	活動・移動動詞と使役性
クラス３	低い	感情性	再帰的、相互的
クラス１１	低い	？	本来的に再帰的、相互的

クラス１１は、それらが表現する出来事や行為が本来的な意味として再帰的、あるいは、相互的な意味をもつ動詞からなる。

４．１２．クラス１２動詞（９７）

クラス１２に所属する動詞は、中動相文も自動詞文もつくらない。クラス１２動詞は、かならず、２個以上の項を要求する。すでに述べたようにクマム語の他動詞は、強く目的語を要求する。すなわち、他動詞の自動詞的用法をクマム語はもたない。したがって、クラス１２は、対として中動相形も、自動詞形ももたない他動詞からなると考えられる。クラス１２には９７の他動詞が記録される。しかし、そのうちの３４は、他の意味で用いられる場合、他のクラスに所属する。むしろ、ある特定の意味に用いられるときのみ、これら３４の動詞は、他動詞文しかつくらないクラス１２に所属するといえる。

４．１２．１．クラス１２動詞ー派生動詞

クラス１２には、他の動詞語幹からつくられた派生動詞や他の動詞語幹、あるいは、他の動詞

語幹の一部を重複してつくられた派生動詞が所属する。重複によりつくられた派生動詞は、出来事や行為の繰り返しを意味する。

４．１２．２．クラス１２動詞の意味的特徴

クラス１２動詞が表現する出来事や活動の意味的特徴は、以下のとうりである。

１）身体動作、また、病気の症状、ただし、身体部分や病気の症状が主語のスロットをめる：**have nausea, itch, feel sleepy, feel ashamed, have no appetite, give pain**

極端に受動的な受動作者をともなう「身繕い」動詞：**undo hair**

極端に受動的な受動作者をともなう内的経験：**strain one's ear, praise(splash), judge(cut), agree(imitate), doubt(bend over), lay a curse by evil-eye, decide, look into**

括弧で示された別の意味をともなう動詞は、別の意味では他のクラスに所属する動詞である。括弧内は、同じ形式が他の意味では他のクラスに所属するときの意味を表す。

(55) del-a Il-A (Transitive)
skin-my 3sg-IMP-itch-1sg
'My skin itches.'

２）極端に受動的な受動作者をともなう動的な活動、ただし、この意味的特徴をもつクラス１２動詞の多くは、他の意味で用いられるときは別のクラスに所属する：**bury corpse, divorce(untie), knock a door(beat), breathe in(pull), nod one's head(cut open), blame(press), celebrate(eat), give a name(start), get out of(leave), obstruct someone to say(obstruct), expose oneself to wind(drink), watch over(request), take (a girl) to homestead, dismiss(chase)**

括弧内は、別のクラスに所属するするときの意味を表す。

(56a) a-iko IcUO (Transitive)
1sg-IMP-bury man
'I bury a corpse.'

(56b) a-iko mwongo (Transitive)
1sg-IMP-bury cassava
'I bury cassava.'

(56c) mwongo o-ik-ere (Middle)

cassava 3sg-PERF-bury-Mid

'The cassava has been buried.'

(56d) *IcUO o-ik-ere (Middle)

man 3sg-PERF-bury

'The corpse has been buried.'

3）本来的に強い使役的な意味をともなう動的な活動：demand payment, forbid to eat, make someone to wait, provoke(fight), refuse to give, give, give a wedding gift

括弧内は、別のクラスに所属するときの意味を表す。

(57) A-mIO ItAbU (Transitive)

1sg-IMP-give book

'I give a book.'

4）同族目的語によってともなわれる動詞：sing, dance

(58) a-wero wer ber (Transitive)

1sg-IMP-sing song good

'I sing a nice song.'

5）上記1）から4）までの動詞が表現する出来事や行為の繰り返し：make something compact, deduce, sprinkle, tickle, flap wings, soothe, grope, sympathize with

(59) gwEnO totong'o cAm (Transitive)

chicken 3sg-IMP-pick up food

'The chicken picks up food bit by bit.'

クラス１２動詞が表現する出来事や活動には、さまざまなものがある。はじめに身体動作、ならびに、病気の症状がある。クラス１２動詞が表現する出来事や行為には、少なくとも２個の

関与者が関与する。そして、身体部分、あるいは、病気の症状が、行為者、あるいは、原因者として、主語のスロットを埋める。たとえば、（５５）の文において「身体、皮膚」が行為者、あるいは、原因者として主語のスロットを埋める。一方、「わたし」は、受動作者、あるいは、被原因者として、目的語のスロットを埋める。受動作者「わたし」は、極端に受動的な受動作者と考えられる。なぜなら、かゆみを与える「身体、皮膚」に対して、「わたし」はそのかゆみを甘受するしか方法はない。

クラス１２動詞は、極端に受動的な受動作者をともなう内的経験、あるいは、動的な行為を表現する。この仲間の動詞は、他の意味で用いられるときには別のクラスに所属する。たとえば、（５６a）において動詞 iko 'to bury'は、「死体を埋葬する」を意味するとき、クラス１２に所属し、かならず目的語を要求する。また、この目的語を主語にして中動相文をつくると、（５６ｄ）の文が得られるが、クマム語の話し手は、この中動相文を意味的に不適格な文と判断する。なぜなら、「死体」は、極端に受動的な受動作者であるからである。「死体」は、誰かによって、必ず、埋葬されなければならない。埋葬されずに放っておかれることはない。このような受動作者を極端に受動的な受動作者 extremely passive Patient と呼ぶ。「埋葬する」なに者か、行為者が必ず存在するだけでなく、その行為者に必ず焦点があてられる。その行為者が必ず焦点のスロットを埋める。一方、極端な受動作者は必ず目的語のスロットを埋めなければならない。極端な受動作者は、主語のスロットを埋めることはできない。

しかし、動詞 iko 'to bury'をその一般的な意味である「なにかを土のなかに埋める」という意味で用いるなら、この動詞は、クラス２に所属する。たとえば、（５６ｂ）において行為者「わたし」は、受動作者「キャッサバ」を土のなかに埋める。一方、受動作者を主語にしてこの動詞を用いた中動相文をつくることができる（５６ｃ）。「キャッサバ」は、極端に受動的な受動作者ではないから、中動相文において主語のスロットを埋めることができる。したがって、中動相文（５６ｃ）は、意味的に適格な文であるとクマム語の話し手によって判断される。このようにこの仲間の動詞は、一般的な意味で用いられるときは、クラス１２以外のクラスに所属し、特定の目的語と結びついて特殊な意味で用いられるときは、クラス１２に所属する。クラス１２動詞として用いられる場合、これらの動詞は、中動相文や自動詞文をつくることはない。

強い使役的な意味をともなう行為や出来事を表現する動詞は、クラス１２に所属する。たとえば、mIO 'to give'は、なにかモノに働きかけて、それが存在する位置を、ある場所から別の場所へと、変化させることを意味する。たとえば、（５７）において「本」は「わたしの場所」にあるけれど、行為者「わたし」は、「本」に働きかけて、そのあった場所「わたしの場所」から

別の場所「だれか他のヒトの場所」へと移動させる。このように、この仲間の動詞は、モノやヒトに強く働きかけて、モノを移動させたり、状態を変化させる。

同族名詞と結びついて、ある特定の意味を表現する動詞は、それを用いて中動相文や自動詞文をつくることはできない（５８）。同族名詞は、極端に受動的な受動作者であると考えられる。

５．まとめ

第４章でクマム語の動詞がその意味により分類できることを検討した。実際、第４章で考察した意味的特徴から、動詞がどのクラスに所属するか予測することは、ほぼ間違いなくできる。たとえば、調査をおこなう過程でクマム語の話し手から新しい未知の動詞を聞き出したとする。そこで第４章で検討した関与者の切り離し可能性や情報性、感情性、使役性、さらに、自発性などの意味的特徴を検討すれば、その新たに知った動詞がどのクラスに所属するかをほぼ正確に予測できる。そして、その動詞を用いて中動相文をつくることが可能か、自動詞文をつくることが可能かをほぼ正確に予測することができる。この予測にしたがって文を作文し、クマム語の話し手がどのような文の適格性を判断するかを実験することができる。

この実験からクマム語の話し手は、文の意味的な適格性についてかなり整合的な判断をおこなっていると考えられる。また、クマム語の話し手は、文の意味論的な適格性を判断するためになんらかの一貫した基準をもっていると考えられる。したがって、本論が基づいている資料は、動詞を意味論的に分類するに十分な根拠をもっていると考える。

クマム語の動詞は、その意味から分類できる。そして、形態的には同一の形式、たとえば、中動相形や自動詞形において、動詞の意味にしたがって、動詞がとる項の文法関係が決定されることが明らかになった。本論で展開した言語記述の方法が、クマム語の文法をより良く理解するために有効であると考える。

注

本論文は、文部科学省研究費補助金（国際学術研究）平成１２年度特定領域研究（A）研究課題「言語崩壊時に生じる言語現象の動態的研究－崩壊言語の形態論における単純性と規則の透明性－」（研究代表者稗田乃）課題番号１２０３９２２７によりおこなった調査で集められた資料に基づいている。また、在外研究により滞在したフランクフルト（ウォルフガング・アマデウス・ゲーテ）大学アフリカ言語研究所において発表した研究をまとめた日本語版論文である。

あたたかく筆者をむかえてくれた研究所所員一同に感謝したい。

1） Welmers（1971）は、クマム語の話し手の数を約５万５千人としているが、最新の数字は、Ethnologue-Languages of the World、１４版による。

2） Ewoku-Ebinu, Samuel 2000 を参照。

3） クマム語の中動相をつくる形態素は、もともとは、再帰形をつくる形態素なかの、主語が３人称・単数と照応した形式であった。つまり、再帰形は、クマム語においても過去には主語の人称・数と照応して形を変えていたと考えられるが、そのうちの３人称・単数の形式が固定して、中動相をつくる形態素となった。

4） クマム語動詞そのものの形式は、クマム語語彙集を用意している。

5） 中動相形がつくられたもとになる動詞語幹は、tu である。母音で終わっている。

参考文献

Dixon, R.M.W. & A. Y. Aikhenvald 2000. *Changing Valency. Case Studies in Transitivity.* Cambridge: Oxford University Press.

Ewoku-Ebinu, S. 2000. *A Brief History of Kumam Culture.* M.S.

Grimes, B.F. 1988. *Ethnologue: Languages of the World.* Dallas: Summer Institute of Linguistics.

Kemmer, S. 1993. *The Middle Voice.* Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins.

Noonan, M. 1992. *A Grammar of Lango.* Berlin & New York: Mouton de Gruyter.

Reh, M. 1991. *Anywa Language.* Koeln: Rudiger Koeppe.

Tucker, A.N. 1994. *A Grammar of Kenya Luo (Dholuo).* (ed.) by Ch.A. Creider. Koeln: Rudiger Koeppe

Vossen, R. *The Eastern Nilotes.* Berlin: Dietrich Reimer.

Welmers, Wm.E. 1971. 'Checklist of African Languages and Dialects,' *Current Trends in Linguistics vol.1,* pp.759-900.